とあるポケモン達の旅

究極神団・零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるポケモン達の旅

【Ｎコード】

Ｎ５６２８Ｊ

【作者名】

究極神団・零

【あらすじ】

此処はポケモン達だけが住む世界……。ポケモン達は皆平和に仲良くのんびり暮らしていた……。そんな世界でのあるポケモン達の旅物語

プロローグ（前書き）

はいどもー！
究極神団です～

本当は二月一日に投稿する予定だったんですが我慢出来ませんでしたーw

でも更新は不定期なのでそこら辺だけは御愛敬で（殴、蹴、頭突

プロローグ

此処はポケモン達だけが住む世界

ポケモン達は皆、のんびり、仲良く、平和に暮らしている

此処にもそんな一人のポケモンが……

「フフンフ〜ン♪」

ちょっぴり厳つい顔に赤い大きな翼、其なりに長い尻尾に四本の足

……

彼がこの物語の主人公、ボーマンダ

しかも色違いのボーマンダだ

「あ♪村だ♪」

見た目でポケモンを判断してはいけない

彼は見た目とは違いとも優しい口調と性格をしている

「この三日間野宿だったからやっと布団で眠れる〜♪」

ボーマンダはどうやら旅人らしい

だがそんな能天気な旅人、ボーマンダが今辿り着いた村で、彼自身の運命を変えるかもしれない壮大な事に巻き込まれる事になるとは見ず知らずの人達や親友、そしてボーマンダ自身……知るよしも無かった……

プロローグ（後書き）

ボーマンダ
「皆さん初めまして～♪」

前書きにも書いた通り更新が不定期ですが……

ボーマンダ
「宜しくお願いしま～す♪」

第一話　VS盗賊（前書き）

サブタイトルに若干のネタバレ（汗）

でも此しか浮かばなかったんですよ刑事さん……

ボーマンダ

「誰が刑事さんなのかな♪」

ちみしか居ないでしょ（汗）

まあ今回はボーマンダの実力の一部を垣間見る事に……

ボーマンダ

「～♪」

ダメだ（汗）

聞いてない（汗）

第一話　VS盗賊

村を見付けたボーマンダはダッシュで村の中に向かって行った

ボーマンダが村に入ってみると

「……？」

誰一人としてボーマンダ以外居なかった

探しても見付からないので村長と思わしき家を探し始めたボーマンダ

暫く歩く（低空飛行している）と、他の家より一回り大きな家が建っていた

「此処かな……？」

とりあえずノックして家に入るボーマンダ

「こんにちは～♪」

が、家の中にも誰も居なかった……と思っていたら

「……」

部屋の隅っこでうずくまっているポケモンがいた

「……あの～」

話し掛けてみると

「っ？！」

物凄いビクッ、と反応した

「……どうしたんですか？」

恐る恐る聞いてみると

「頼むから命だけは……」

「え？」

予想だにしない返事に間の抜けた声が出てしまったボーマンダ

「……へ？」

相手のポケモンもボーマンダの間の抜けた声につられて気の抜けた声が出る

「……どういう事？」

「……あんたは誰なのじゃ？」

論点のずれている会話

此処は引き下がるが吉と思ったボーマンダは相手の質問に答えた

「ボクはボーマンダ。旅人さ」

そう伝えると

「成る程……、旅人であったか……。儂はこの村の村長をしておる……只のボスゴドラじゃ……」

どう考えても見た目は若々しいのに喋りが超おじいちゃんな村長、ボスゴドラ

「……で、さっきの命だけはって……？」

ボーマンダがボスゴドラが注いでくれたお茶を口に運んでから聞く

「実はな……、ここ最近……盗賊がこの村にやって来てな、食料や金銭を掻っ払って行きおったのじゃ……」

なんと、盗賊がこの村を襲って来たのだという

「無論、儂等も黙ってやられる訳にはいかん。若い衆が盗賊を倒しに向かったのじゃ……じゃがな……」

「？」

「……盗賊は恐ろしく腕の立つ奴でな、一人だけ生きて帰っては来たのじゃが……負わされた傷が原因で倒れたまま目が覚めぬまま……」

「……」

ボーマンダは気になっていた

一人だけ生きて帰って来た――

という言葉が

じゃあ他の人達は？

答えは一つ

――殺された

其なら村長の「命だけは」も合点がいく

そして等の村長、ボスゴドラは、

泣いていた

だからボーマンダはこう村長に告げた

「……その盗賊は、ボクが倒してきます」

「……あんた今なん……」

村長が顔を上げるが既に其処にはボーマンダの姿は無かった

ボーマンダは盗賊のアジトと思わしき場所を探し回った

其から暫くして

「……彼処かな？」

アジトと思わしき洞窟を発見した

「……」

まずは様子を見る事にしたのだが――

その必要は無かった

何故なら都合よく盗賊が洞窟から現れたからだ

その証拠に

「オイ、どうする？　今日もあの村襲うか？」

「ギャハハ！　そらいいな！　あの耄碌爺の土下座でも拝みに行こうじゃねぇか！」

会話しているのはカブトプスと呼ばれるポケモンとアーマルドと呼ばれるポケモンの二人だった

先程の会話で確信したボーマンダは二人の目の前に堂々と現れた

「……んだテメェは？」

「君達か、あの村を襲ったのは……」

「嗚呼、そうだ……」

カブトプスの質問を無視したボーマンダの質問にアーマルドが答えた瞬間、

「がはっ……」

カブトプスがその場から十メートル程吹き飛ばされた

「っ！　貴様今何をした？！」

ボーマンダはその場から動いていないのにカブトプスが吹き飛ばされたようにアーマルドは見えた

だが其は違った

ボーマンダが目に見えない速度でカブトプスに近付きドラゴンクローを決めて元の位置に戻ったのだ

「……ボクは君達を許さない」

その眼は怒りに燃えていた

「ほざけ！　シザークロス！」

アーマルドが両手を光らせボーマンダを切り裂こうとした

「……ドラゴンクロー」

が、其はボーマンダの片手だけのドラゴンクローにより遮られた

「コイツ！　なんて力だ！」

アーマルドがパワー全開で押し切ろうとするも微動だにしない

「……」

ボーマンダはまだ半分の力も出していないという表情をしている

「がぁぁぁぁぁっっ！！」

無理矢理破ろうとするもやはり微動だにしない

その時、ボーマンダが

「……さようなら」

と呟いたその瞬間、

アーマルドの身体が宙を舞った

「か……は……」

そのままアーマルドは地面に叩き付けられ、気絶した

「……もっと周りに気を張らなきゃ」

吐き捨てるように言った

ボーマンダはドラゴンクローで相殺している間にアイアンテールのパワーを溜めていたのだ

そして溜まりきった所を――

アーマルドの身体へと叩き込んだのだ

しかし、このボーマンダ、いったい何者なのだろうか

この戦いを、自分は無傷で終わらせたのだから……

第一話　VS盗賊（後書き）

盗賊、と表記したものの実は二人組でした

ボーマンダ
「ボクの敵じゃ無かったけどね♪」

そりゃそうだろ（汗）

彼奴等雑魚の雑魚に設定してるんだから（嘘

ボーマンダ
「成る程〜♪」

（信じちゃったよこの子（汗））

第二話　謎の〇〇〇〇（前書き）

ネタバレ防止の為伏せ字にしやした

ボーマンダ

「なんだろ～♪気になるなぁ～♪」

まあ見てのお楽しみって事で

第二話　謎の〇〇〇〇

盗賊を撃ち破ったボーマンダ

ボーマンダが先程の村に帰ると

「おお！　我等が救世主が帰って来なさった！」

村長のボスゴドラを筆頭に、何処かに隠れていた村人全員がボーマンダを出迎えていた

「ふぇぇ～？！」

突然の事に茫然とするボーマンダ

村人達は何処にあったのかクラッカーを鳴らしまくっていた

「ふぇぇ～……耳が～……」

そんな中子供と思わしきポケモン達――ジグザグマ、ズバット、ココドラ、キャタピー等――がボーマンダの顔の近くでクラッカーを鳴らしていた為ボーマンダの耳にはかなりダメージが入っていた

だがボーマンダはそんな子供達を怒る事も無く村の中を歩いて（低空飛行して）いった

少し歩いて（飛んで）再び村長の家の中、

「いやはや……なんとお礼をすれば良き事やら……」

「ボクはなにもしてないよ♪」

ひたすらに頭を下げ続ける村長。何回か頭を床に打ち付けているため床が一部分かなり抉れている

「まあまあ。頭上げてさ♪」

「う、うむ……」

ボーマンダに言われ顔を上げる村長

その時、何かを思い出したのか

「そ、そうじゃ！」

急いで奥の部屋に入って行った

「？」

待っていると

なにやらドカーンとかズゴーンとかちょっとした爆音が鳴り響いてきた

「ふぇ～……」

さっきのクラッカーの事もあってか耳が痛むらしく両手で押さえている

「待たせたの」

爆音が止み村長が現れ

「此を受け取って貰えぬか？」

そう言ってボーマンダに差し出したのは

「……プレート？」

鋼色に輝くプレートだった

「此は『鋼のプレート』。儂の家に代々伝わる秘宝……なのじゃが、なにに使うか全く分からんのじゃ」

「ふ～ん……」

話を聞きながらプレートを日に翳したりして眺めているボーマンダ

「じゃが、最近このプレートについてある事が分かったのじゃ」

「ふぇ？」

重大な話になってきたので眺めるのを止めて村長の方を向く

「……このプレートが、この儂達ポケモンの住む世界を創った創造神に繋がる事が分かったのじゃ」

「えええぇぇ？！」

なんと神に繋がるのだという

その上神は神でも全てを創り上げた創造神

ボーマンダはびっくりしてプレートを落としそうになった

「この話は事実なのじゃ」

嘘を言っているようには見えない

本当の事のようだ

「……わかったよ♪」

一瞬だけ悩んだが了承したボーマンダ

「おお！　そうか、受け取って貰えるのじゃな！」

大喜びの村長

「うん♪」

其に笑顔で答える

「其に……、あんたなら本当に創造神に会える気がしてならんからの……」

プレートを持ってくるくる回っているボーマンダの隣でそう小声で

呟く村長だった

第二話　謎の〇〇〇〇（後書き）

其なりに物語が加速しやした

……如何ですかな？

感想、評価、指摘待ってます

ボーマンダ

「宜しくね～♪」

第三話　出発！　そして騒がしい奴（前書き）

まあ村を出る話なんですがぁ

ボーマンダ
「ふぇ？」

新キャラ＋バトルありますw

ボーマンダ
「ふぇ～」

お楽しみあれ

第三話　出発！　そして騒がしい奴

鋼のプレートを村長から受け取ったボーマンダ

其から数時間後

「もう、行ってしまわれるのか……」

ボーマンダと村民達はボーマンダが村に入ってきた所とは反対の出入口に集まっていた

ボーマンダがもうすぐこの村を発つからだ

「うん♪このプレートの謎を解き明かす為にね♪」

ボーマンダは先程受け取ったプレートを見せながらそう言った

村長以外の村民達は皆プレートの事を知らないのでちんぷんかんぷん状態だが

「そうじゃな……、其に儂等にはあんたを引き留める権利など無いからの……」

其は当たり前なのだが

「んじゃ、ボクもう行くよ♪ありがとね♪」

笑顔で飛び立つボーマンダ

「元気でな！　あんたの無事を祈ってるぞ～！」

手を振って笑顔で見送る村長と村民達

其はまだ日が天(そら)の真ん中に昇っている時だった

村を出て少し日が傾き始めた頃

「……う～ん」

ボーマンダは森の中で迷子になっていた。

しかも色違い故に緑緑で紛らわしいったらありゃしない

「あはは～、どうしよう～、迷っちゃったな～♪」

何故そこで嬉しそうなのか理解に苦しむ

と、そんな時

「うをををををををッスぅぅぅぅ！！！」

とてつもない叫び声が森中を駆け巡った

「ふぇぇ～……、耳がぁ～……」
まだ耳のダメージが残っていたらしい
少しぐわんぐわんとなっている
「せいやぁぁぁ！！！」
またしても叫び声
だが今度は叫び声と同時に……
「ふぇ？」
ボーマンダの頭上に大きな影

大木が降ってきたのだ
「ふぇ～……」
降ってくる大木を眺めるボーマンダ
いや眺める前に避けろよ
「ん～と……」
すると何故か構え始めるボーマンダ

そして――

「ドラゴンクロー」

ザクッ、という音がしたと思うと

なんとボーマンダのドラゴンクローに大木が突き刺さっているではないか

貫通するでもなく、二つに斬れるでもなく、突き刺さっているのだ

しかも其を片腕だけで持っている

「よいしょ～♪」

その突き刺さった大木を地面に埋めるボーマンダ

器用な事をするもんだ

「……よ～し♪此でオッケ～♪」

ドラゴンクローに突き刺さった跡以外周りの木々となにも変わらないようにしか見えなくなった

「でもなんで飛んできたんだろう？」

何故か正座をして考えこんでいると

「ぬをををををッス！」
またしても叫び声が
だが今度はかなり叫び声が近い
誰かが近付いて来ているのだ
「ふぇ～……？」
暫く待っていると
「をを？！　人が居るッス！」
人というより龍なのだが
「やっほ～♪」
とりあえず挨拶をするボーマンダ
「どうもッス！　オイラヘラクロスッス！」
カタカナでややこしいがこのポケモンはヘラクロス
大きな一本角が特徴の虫ポケモンだ
身体は全体的に殆どかぶと虫に似ている
「ボクはボーマンダ♪」

互いに自己紹介をすると

「ボーマンダ……、オイラとバトルするッス！」

「ふぇ？」

何故かいきなりバトルを申し込むヘラクロス

一瞬悩んだボーマンダだが

「いいよ～♪」

軽く了承した

「恩に着るッス！」

こうして衝動バトルが始まった

「ボクからいかせて貰うね～♪」

とボーマンダがそう告げた瞬間

「？！」

ヘラクロスの目の前から消えた

「ドラゴンクロー！」

消えたかと思うといきなりヘラクロスの背後に現れるボーマンダ

盗賊との戦いの時に見たあの動きだ

「瓦割りッス！」

だがヘラクロスも黙ってダメージを受ける訳にはいかず瓦割りで相殺する

「おお～♪」

ボーマンダは悟った

このヘラクロスはかなり強いと

瓦割りで相殺した直後バックステップで距離を取られたからだ

「今度はコッチからッス！　メガホーンッス！」

虫タイプの大技をいきなり繰り出すヘラクロスだが、そのスピードはかなりのもの

「ならボクは……ドラゴンダイブ！」

少し飛び上がり物凄い勢いでヘラクロスに突っ込むボーマンダ

技と技がぶつかり合ったその時、両者共吹き飛ばされた

「あ～♪」

「うををー！！」

吹き飛ばされ二人共後ろの木に叩き付けられる

互いの技の威力が凄まじかったらしい、反動で吹き飛ばされたのだ

「いたたたた～」

だがボーマンダはあまりダメージを受けていないようだ

どうやら特性の威嚇が威力を下げ、ボーマンダは飛行タイプ、虫タイプは今一つなのであまりダメージを受けなかったという事だ

一方対するヘラクロスは……

「ぬをををを！　燃えて！　燃えて来たッスぅぅぅ！！！」

なにやら一人盛り上がっている

「高速移動から燕返しッス！」

そうヘラクロスが叫ぶと一瞬でボーマンダの背後に周り、

「？！」

大木ごとボーマンダを吹き飛ばした

「ぐっ！」

流石に今のには苦い顔付きになるボーマンダ

「気合い溜めをしてたとはね～、油断してたよ～」

そう、ヘラクロスは先程の叫びの時に気合い溜めをしていたのだ

今の一撃はかなりのものだったらしく少しボロボロなボーマンダ

「……よ～し♪じゃあコッチも気合い溜め～♪」

「をををををッス！」

両者共気合い溜めをする

周りの小石が中を舞い踊っている

「オイラの最強技！　ギガホーンッス！」

先に動いたのはヘラクロス

最初の時のメガホーンとは比較にならない程のパワーとスピードだ

「……」

其に対してボーマンダは黙って構えている

だがよく見ると尻尾が光っている……が、アイアンテールには見えない

なにやら蒼白く光っている

「喰らえッス！」

もう眼前までヘラクロスが迫った時

「……ドラゴンテール！」

ボーマンダの蒼白く光る尻尾がヘラクロスとぶつかる！

「ふんぬををををを！！！」

ヘラクロスも必死でドラゴンテールを弾き飛ばそうとするが少しずつ自分が後ろに押されている事に気付く

「ぬをををッス！　負けないッスぅぅぅぅ！」

すると特性の虫の知らせが発動し少しずつボーマンダを押し返す

「負けないよ〜！♪」

負けじと更にパワーを込めるボーマンダ

両者共譲らない！

「ふんぬぅぅぅぅ！！」

「うおりゃあ〜♪」

だがその時、

「ッ？！」

ヘラクロスのパワーが少し落ちた

ボーマンダの威嚇が再び効いたのだ

「隙ありぃ～♪」

この隙を逃さすボーマンダは思いっきりヘラクロスを吹き飛ばす

「しまっ……」

だがもう既にヘラクロスの身体は中に浮いていた

そして、ヘラクロスの身体は地面に叩き付けられた

少し待っても起きる気配が無い

どうやら気絶しているようだ

「ッス～……」

この勝負は、ボーマンダの勝利に終わった

第三話　出発！　そして騒がしい奴（後書き）

とゆー訳で新キャラのヘラクロスです

ヘラクロス
「宜しくッス！」

騒がしい奴ですねぇw

因みにヘラクロスはある作者さんにリクエストして貰いにいきましたw

ボーマンダ
「ふぇぇ～」

ボーマンダそればっかだなw

第四話　新たな旅の仲間＋〇〇〇〇〇（前書き）

〇の部分は想像して下さいｗ

因みにヘラクロスについてですが……

ヘラクロス
「うッス！」

リクエストした方……、ｊｏｋｅｒｓ作者のシルバーさんです

ヘラクロス
「うをッス！」

ヘラクロスｗ
お前分かってないだろｗ

第四話　新たな旅の仲間＋〇〇〇〇〇

突然ヘラクロスとバトルを始める事になりそのバトルに勝利したボーマンダ

「う～ん♪美味しい♪」

だがバトルが終わった後何故かアイスを食べていた

何処に持っていたのだろうか

そんなアイスの匂いにつられてか

「……アイスオイラも欲しいッス！」

ヘラクロスがばっと起き上がった

「あ♪おひひゃ～♪」

アイスを頬張りながら話し掛けている為あんまり何を言っているか分からない

「オイラの分……あるッスか？」

口からよだれが垂れている

余程甘い物好きなのだろう

「あふぅひょ～♪」

まだ頬張っているためちゃんと喋れていないがまた何処からかアイスを取り出しヘラクロスに渡す

「うををををッス！　ありがとうッス！　感謝感激ッスゥ！」

泣いて喜ぶヘラクロス

余程嬉しかったのだろう、勢いよくアイスにかぶり付く、が、

「あ……」

自分の暑苦しさでアイスが半分溶けてしまっていた

「ありゃ～」

それをただ眺めるボーマンダ

勿論アイスを食べながら

「……」

そして暫くヘラクロスは無言でその場に佇んでいた

因みにその間ボーマンダが顔を引っ張ったりして遊んでいたのは別の話だ

それから数十分後

「……オイラ、アンタに着いていくッス！」

ヘラクロスがボーマンダと一緒に旅をしたいと申し出て来た

無論ボーマンダは

「いいよ～♪此から宜しくね～♪」

即、ＯＫを出した

「うをををッス！　ありがとうッス！　此から宜しくッスゥゥゥ！」

こうして、暑苦しい上に五月蠅い、ヘラクロスがボーマンダと共に旅をする事となった

「じゃあ早速次の村を目指して出発するッス！」

「おお～♪」

なんか立場が逆になっているような気がするが……

其から十分後

「見えて来たね～♪」

次の目的地である村が見えてきた

「そうッスね！」

だが何故かヘラクロスだけボロボロになっている

原因として森を抜ける前に何度も木々にぶつかり、その上そのぶつかった木の一本がスピアー達の巣だったのでヘラクロスだけ追いかけられたのだ

ボーマンダはというとヘラクロスと距離があったため（ヘラクロスが一人突っ走っていったため。そのせいで木々にぶつかっている）スピアー達に狙われる事はなかった

「……其にしても酷い目にあったッスよ～」

自業自得だと思うのだが

「ドンマイだよ～♪」

優しく励ますボーマンダ

そんなこんなで村の入口が見えてきた……のだが

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

「ぁぅぅ～……。ど……、どうすればいいのさ……」

凄い光景が広がっていた

「……な、なんなんッスか？」

「ん～、わかんない♪」

だから何故嬉しそうなのか……

目の前に広がっている光景とは――

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいい……」

「あぅぅ～……、ホントに……どうすればいいのさ……」

鮫のような姿を象り如何にも速さに特価したような姿のポケモン、ガブリアスが何故か、東方の龍を象ったような姿をしかなり厳つい顔をしているポケモン、ギャラドスに土下座をしまくっていた

ごめんなさいと謝っているのがガブリアス
半泣きでおどおどしているのがギャラドス

なんという光景だろうか

「もしも～し♪」

だがそんな光景を気にする事もなく普通に話し掛けたボーマンダ

が、

「「…………」」

暫しの沈黙の後

「ぁぅぅ〜……、見られてたよぉ……、ううっ……」

泣き出すギャラドス

そして

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……。こんな見苦しい所を見せてしまってごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいぃぃぃぃぃぃぃ……」

何回謝るのだろうか
もう何回「ごめんなさい」とこのガブリアスは言っただろうか

「……扱い難いッスね」

そんなガブリアスとギャラドスにそう一言で纏めたヘラクロスだが、ヘラクロスも扱い難いのだよというコメントが天から聞こえて来たとか来なかったとか

第四話　新たな旅の仲間＋〇〇〇〇〇（後書き）

とゆー訳でヘラクロスが旅の仲間になりました

ヘラクロス
「うををををッス！　宜しくッスぅ！」

五月蝿いよw

ヘラクロス
「をッス！」

w
さあお次は……

気弱なガブリアスアーンド臆病ギャラドス！！www

ガブリアス
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……。僕みたいな奴がこんな所に出てごめんなさいぃ……」

ギャラドス
「ぅ～……、緊張するよ～……」

因みにガブリアスとギャラドスもとある作者さんのリクエストキャラですw

さあレッツ予想w

ボーマンダ
「誰なんだろう〜♪」

第五話　そして其は突然に、唐突に（前書き）

いやーはーw

今回は完全なるギャグ路線路線www

ボーマンダ
「ふぇぇ」

因みにボーマンダ、ちみがかなり関わってるからw

ボーマンダ
「ふぇ？　ボク？」

あいwww

そしてガブリアスとギャラドスですが……春野ツバサさんからのリクエストです

ヘラクロス
「をッス！」←分かってない暑苦しい蔵w

さあ、貴方は今夜、とある場面に遭遇する……w

第五話　そして其は突然に、唐突に

「あ……、えと……僕はガブリアスです……」

「ぎゃ……、ギャラドスです……ぅぅ……」

ガブリアスとギャラドスが落ち着いた頃改めてボーマンダとヘラクロスに自己紹介をする二人

「ボクはボーマンダ♪宜しくね♪」

「オイラはヘラクロスッス！　宜しくッス！」

ボーマンダとヘラクロスも自己紹介をする

でもギャラドスは終始おどおどしていた

（うわぁぁぁぁ……どうしよう……）

何故か悩んでいた

何に悩んでいるのかというと、

（……あ……あんな所見られちゃったから……うわぁぁぁぁ……！）

そう、先程のガブリアスとのやり取りをボーマンダとヘラクロスに見られて恥ずかしいのだ

ギャラドスは頭をブンブンと振って思考を掻き消そうとするが、上手くいなかい

そんなギャラドスの傍らで、

「……」

ガブリアスは何故かもじもじしていた

「？」

気になったボーマンダが顔を覗き込む

「はぅ……」

ガブリアスは急いで顔を後ろに向けて手で覆い隠した

（はぅぅ……恥ずかしいよぉ……）

「どうしたの～？」

今度は回り込んでガブリアスの顔を覗き込もうとするボーマンダ

「ひゃ、ひゃい？！　なんれすひゃ？」

急に声をかけられ、其に驚いてしまったらしく呂律が回っていなかった

「ホントに大丈夫？」

珍しく少し真剣な表情になるボーマンダ

「はぅぅ！」

そんなボーマンダの顔を見て真っ赤になるガブリアス

もうお気付きだろう、このガブリアス……、

ボーマンダに一目惚れしたのだ

「？」

だがボーマンダはそんな思考は微塵にも今は読み取れていなかった

（はぅ……、私どうしたらぁ……）

そしてお察しの通り、♀なのだ

一人称が「僕」から「私」に変わっている

「お～い♪」

そんな事を知るよしもなくのんきに手を振って注意を引くボーマンダ

「ふぇ～……」

だがいくら注意を引いてもガブリアスは其に気付く事がないので心配になったボーマンダは

「ねぇ、ホントに大丈夫なの？」

物凄いガブリアスに接近して問いただした

「ふぁ……、ふぁい？！　顔近いですよぉ！」

顔が物凄い近い事に気付いたガブリアスは慌て始める

そして口調が変わっているのは気のせいではない

「？」

其に気付かないボーマンダ

天然なのか、と、疑問を持ちたくたる

しかし、ガブリアスは更にエスカレートし

「わ、私は大丈夫ですから！　大丈夫ですからぁ！」

恥ずかしさのあまりその場から逃げ出そうとした

「ふぇ？」

だが離れようとしないボーマンダ

狙ってやっているのか分からない

（はぅぅぅ……。は……、恥ずかしいっ！！）

凄まじい程パニクっているガブリアス

顔をマッハの速度でブンブン振っている

そんなガブリアスは、パニックのあまり、ついにある言葉を叫んでしまった

「ボーマンダさん！　貴方に一目惚れしちゃいました！　私と付き合って下さいっ！」

愛の、告白を――

「「……」」

暫しの沈黙の後

「「（ふ）えええぇぇぇぇぇぇ？！」」

ガブリアスの愛の告白に負けず劣らずの叫び声が響き渡った

（……言っちゃった……はぅぅぅぅぅ……。私……、すっごく恥ずかしいよぉ……）

愛の告白を叫んだ本人、ガブリアスは地面にうつ伏せで倒れていた

顔をこれ以上赤く染まるのかという程赤く染めて――

因みにヘラクロスはガブリアスの愛の告白を聞くまではギャラドスの扱いに困り果てていて、ギャラドスは半泣きで地面にのの字を書いていた為にボーマンダとガブリアスのやり取り（経緯）をいっさい知らない

第五話　そして其は突然に、唐突に（後書き）

如何ですかなｗｗｗ

愛の告白ｗ

ガブリアス

「……／／／／／」

見事に真っ赤になって気絶してますねｗ

ギャラドス

「うわぁぉぅ……」

さあボーマンダのこの愛の告白に対しての返事はいったいどうなるのか？！

ガブリアスの恋の行方は？！

必見ですｗ

ボーマンダ

「ふぇ～……／／」

第六話　愛の告白、その返事は……？（前書き）

ガブリアスの愛の告白……

遂にその返事が……

分かります

ボーマンダ
「ふぇ～」

因みにヘラクロスとギャラドスは今回は名前しか出演しませんw

完全に二人の世界ですのでw

ボーマンダ
「～♪」

第六話　愛の告白、その返事は……？

其は唐突だった

初対面の相手にボーマンダは告白されたからだ

「ふぇ……」

流石のボーマンダもおろおろしている

若干顔を紅く染めながら

「……」

そして愛の告白を叫んだ当の本人、ガブリアスは硬直していた

（うわぁぁぁぁ……、私なに言ってるんだろう……）

ガブリアスは今まで生きていた中で一番恥ずかしい気持ちになっていた

乙女だ

「ふぇ～……」

そんな硬直したガブリアスの傍らでボーマンダは座り込んでいた

「う～ん……」

そして暫く悩みに悩んで悩みまくって

「……よし♪」

遂に決断したようだ

「「！！」」

その言葉に皆反応する

「えっとね～、その～……」

ガブリアスの前に立ち、続けてこう言った

「……いいよ～♪」

「……ああ、やっぱりダメ……え？」

ガブリアスは半ば諦めていたらしいがボーマンダの返事に自分の耳を疑った

「付き合ってもいいよ♪」

なんと、初対面なのにボーマンダはＯＫを出したのだ

このボーマンダの返事にガブリアスは、

「……」

フリーズしていた

「ふぇ～？　どうしたの～？」

異変に気付いたボーマンダは手を振ったり翼や尻尾をひらひらさせたりした。

「……」

だが、効果は無く、フリーズしたままだった

「大丈夫～？」

顔を近付けじーっと覗き込むボーマンダ

「……ふぁい？」

やっと気が付いたらしく目をぱちぱちさせるガブリアス

ぱちぱちさせ終えると

「……ふぁぁぁぁぁぁ？！」

やっと今の現状に気付いた

「大丈夫みたいだね♪よかった♪」

笑顔になるボーマンダ
そんなボーマンダの笑顔を見てガブリアスは
「ふぁぅ……」
鼻血を吹きながら、気絶した
「ふぇ？！」
いきなり鼻血を吹きながら倒れたので驚いておろおろするボーマンダ
しかしまあ凄い事にボーマンダの顔にはガブリアスが吹いた鼻血が
一滴も掛かっていないという

其から何分か後
「……？」
目が覚めたガブリアス
その鼻にはティッシュが詰め込まれている
「此処は……、何処……？」
辺りをキョロキョロ見回す

その時、

「あ♪目が覚めたんだ～♪よかった～♪」

ボーマンダがガブリアスの後ろから話し掛ける

因みに実を言うとヘラクロスとギャラドスは木の実を探しに行っているため居ない

「ひゃい……、なんひょかぁ……」

また呂律が回らなかったガブリアス

その顔はまた紅く染まっている

そして鼻に詰め込んだティッシュは真っ赤に染まり始めていた

「びっくりしたんだよ？　急に鼻血を吹きながら倒れたちゃうもん」

なにがあったかを説明するボーマンダ

「……」

その話を聞いて思い出し、更に顔が紅く染まっていく

「まあ無事だったからもう気にしてないけどね♪」

再び笑顔をガブリアスに向けるボーマンダ

だがその笑顔によりガブリアスは再び鼻血を吹きながら気絶したのは別の話

第六話　愛の告白、その返事は……？（後書き）

さあw

振るなんて出来ませんでしたw

結局今回は鼻血の回だったんですがねw

ガブリアス

「／／／／／／」

なんともまぁ真っ赤なことかw

ガブリアス

「あぅぅ……／／／／／／恥ずかしぃよぉ……／／／／／／」

なんか湯気が出てますw

熱いw

ボーマンダ

「ふぇぇ」

第七話　謎の四人（前書き）

とサブタイトルは書いていても最後の方にチラッとしか出ていない
という事実（汗）

まあお楽しみ下さい～♪

にししししｗｗ

第七話　謎の四人

「うわぁ～♪凄～い♪」

ボーマンダ達（声に出したのはボーマンダだけだが）は驚愕していた

「ここホントに村ッスか？」

「村……、だと思うよ……」

そう、ヘラクロスの言う通り村と呼ぶには程遠かった

立ち並ぶ高層ビル、
大型スー○ー、
数多の街灯、
ア○○ー○メン○パ○ク、

……そう、村と呼ぶには発展しすぎているのだ

だが何故か色んな雑誌や地図には「村」と表記されるのだ

全くもって謎だ

因みにこの村の正式な名前はまだ決まっていないらしい
更に序でに言うとボーマンダが前回訪れた村にも正式な名前は無い
ただポケモン達は皆「村」と呼んでいるのだ
謎が謎を呼ぶとはまさにこの事なのだろうか（意味が違うが）
そんな「都市」と呼んだ方が相応しい「村」に訪れたボーマンダ達
ガブリアスとギャラドスは、ガブリアスはボーマンダの彼女に（なった）為に一緒に旅をするのは当然の事。
ギャラドスはと言うと、「一人が淋しい」からボーマンダ達に着いていく事に。

そんな事はさておき、

「どうしよっか♪」

ボーマンダ達はどうするか悩んでいた（ボーマンダだけは明らかに悩んでいるようには見えないのだが）

「オイラ……」

「ふぇ？」

ヘラクロスが意見を述べる

「オイラバトルがしたいッス！」

「村」にやってきていきなりのバトルやりたい発言のヘラクロス

「……でもバトルしてくれる人なんているのかな」

「あ……」

ギャラドスのツッコミでそんな事考えて無かった、的な表情をするヘラクロス

「き、気合いでなんとかするッスぅ！」

「……」

気合いでなんとかなるのか、とツッコミたくなるギャラドスだった

ヘラクロスが本当に気合いでなんとかしようとしていた矢先、

「あの～……」

ガブリアスがヘラクロスにこう言った

「……僕でよかったら……バトル……」

なんとガブリアスがヘラクロスにバトルを申し込んでいるではないか

気弱なガブリアスが……、と思うが、実はガブリアスにはとある魂胆が

其は……、

彼女として自分の強さを見て貰う為だった

そんなガブリアスの魂胆を知るよしもないヘラクロスは

「いいんッスか?！　やったッス〜！」

飛んで喜んでいた

（作戦成功♪）

少しずつ大胆になり始めたガブリアスだった

〜バトルフィールド〜

とりあえずバトルが出来る場所を探し始めようとしたボーマンダ達だったがバトルフィールドが目の前にあった為にずっこけたのは別の話として、

「行くッスよ！」

「お……、御手柔らかに……」

構える両者

「バトルスタート～♪」

審判ボーマンダの下バトルの火蓋が伐って落とされた……

のだが、

「え？！」

ギャラドスは自分の目を疑った

いつの間にかガブリアスがヘラクロスの目の前に移動していた上に
後数ミリという距離で攻撃がヒットする所で攻撃を止めていたからだ

「……ヘラクロスさん、勝負ありですよ」

「な……」

ヘラクロスも絶句していた

なにもかも理解が追い付いていない状態で半分魂が抜けている状態だ

「勝負あり～♪強いね～♪」

ボーマンダがジャッジを終えた後ガブリアスに近付く

「え、えーと……、ただ高速移動した後にドラゴンクローとドラゴンダイブの合わせ技を使っただけなんだけど……」

だがそれにしては、早すぎる。

ボーマンダより速いのは明らかに目に見えていた

「流石はマッハポケモンと呼ばれるだけはあります……」

「誰ッスか？！」

ふと横から声が聞こえ立ち直ったヘラクロスが前に出て構える

其処に居たのは、黄色い色をしたネズミポケモン、ピカチュウと種族は陸ガメなのか分からないが亀の姿のポケモン、ゼニガメと尻尾の先に炎が灯っているトカゲのような姿のポケモン、ヒトカゲと千年に七日間だけ目覚めると言われるポケモン、ジラーチだった

第七話　謎の四人（後書き）

とゆー訳で、アブソル様の『サイバネティック・パートナー』より、ライト、アクア、トゥエンティ、イグニスの登場です！

ライト
「遂に来たな」

アクア
「来ちゃったね」

イグニス
「あのボーマンダとバトル出来んのかな……」

トゥエンティ
「其よりも……良いのですか？」

？

トゥエンティ
「私のデータベースによれば……まだ細かい部分は決まりきって無いと……」

（汗）
気合いでなんとかするのさ（汗）w

とゆー訳で、コラボ編、始まります

第八話　Ｃｙｂｅｒｎｅｔｉｃ　ｆｉｌｅ　両者対面（前書き）

サブタイトルは適当なんです
ごめんなさい（汗）

まあホントに進展無しなんですが（汗）

兎に角……どうぞ！

第八話　Ｃｙｂｅｒｎｅｔｉｃ　ｆｉｌｅ　両者対面

突如としてボーマンダ達の前に現れたピカチュウ、ゼニガメ、ヒトカゲ、そしてジラーチ

「うわぁ～♪」

「凄い面子ッス！」

（（そっちに言われたく無い））

ヘラクロスの言葉にジラーチ以外が心の中でツッコミを入れていた

「でも……、よく見ると機械だね……」

「にしてはリアル過ぎるッス」

などと色々調べていると

「……はい。私は人間に作られたので」

機械ジラーチが喋った

「わ～♪喋った～♪」

何故か喜んでるボーマンダ

だが喜んでいるのはボーマンダだけで

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいぃぃぃぃ……」

何故かマッハの速度で土下座をしているガブリアスと

「しゃ……喋ったぁ……怖いよぉ……」

何故か泣き始めるギャラドスが居た

因みにヘラクロスは

「宜しくッスぅ！」

（（あ、暑苦しい……））

と、思われていた

哀れ、ヘラクロス

二人が落ち着いて数分後

「ボクはボーマンダ♪宜しくね♪」

「オイラはヘラクロスッス！　宜しくッス！」

「ぼ……じゃなかった……私は……ガブリアスです……宜しく～……」

「……ぎゃ、ギャラドスです……」

まだしていなかった自己紹介をしたボーマンダ達

ヘラクロスだけは先程のいざこざ（？）中に紹介したのだが、ヘラクロス自身がもう忘れているようだ

「俺はライト！　宜しくな！」

「アクアです！　宜しく！」

「俺はイグニス、宜しく」

「私はサイバー上の学習能力を持つ自己進化プログラム・・人工知能、ＡＩです。名前はＩ－２０．通称トゥエンティです」

上から、ピカチュウはライト、ゼニガメはアクア、ヒトカゲはイグニス、ジラーチはトゥエンティというらしい

「しかしよく出来てるねぇ～♪」

ボーマンダがトゥエンティに近付いて何故かくるくる回りながら言う

「な、なんで回ってんだ……」

動揺しながらも突っ込むライト

「分からないッス」

「「……」」

其に即答するヘラクロスに呆れるライトとアクアとイグニスだった

其から更に数分後

「此処で出会ったのも何かの縁だからバトルしない？」

ボーマンダはいきなりライト達にバトルを申し込んだ

「……いっちょやるか！　いいな皆？」

ライトはやる気満々だが一様皆に聞いてみた

「勿論俺は賛成だ！」

「……ライトがやるって決めちゃったから僕もいいよ！」

「色々とデータが期待出来そうです」

なんか一人少し怖いことを言ったのは気のせいだろうか

「バトル成立だね♪よ～し♪早速やろ～♪」

こうして唐突にボーマンダ達とライト達のバトルが始まった

一体誰と誰が戦うのだろうか……

第八話　Ｃｙｂｅｒｎｅｔｉｃ　ｆｉｌｅ　両者対面（後書き）

次話からバトルです

誰と誰が戦うのかは……お楽しみで

第九話　Ｃｙｂｅｒｎｅｔｉｃ　ｆｉｌｅ　バトル前編（前書き）

クイズ大会が思うように進まないし此方も速く更新しないとアブソルさんが困るので更新しやした

今回はバトル……なんですが、熱くないです（汗）

第九話　Cybernetic file　バトル前編

ライト、アクア、イグニス、トゥエンティの四人とバトルする事になったボーマンダ達

「最初は俺っちが行くッス！」

と言って前に出るヘラクロス

気になるヘラクロスの相手は……

「俺が相手だ」

ヘラクロスにとって、タイプがとても不利な炎タイプのイグニスだ

「悪いが、何処から見ても俺の勝ちだ」

「相性だけじゃ分からないって事を見せてやるッス！！」

だがこのヘラクロスの言葉は全く無意味なものになるのだった――

「バトルスター……」

「「……ちょっとまてぃ！！」」

審判がバトル開始を宣言しようとした所をボーマンダ以外が制止する
何故ならば……
「「なんでギャラドス（ヘタレ）が審判やってるのさ?!」」
そう、バトルに関しても何にしてもヘタレすぎるギャラドスが審判をやっているのだ
「審判するのって免許がいるの知ってる……?」
「「へ?」」
意外な事実が判明
審判をするには専用の免許が必要らしい
「ボクその免許持ってるんだ……」
「「えええええ?!」」
これまた意外だった
ギャラドス（ヘタレ）が審判の免許を持っていると言うのだから
「みる……?」
「「いや、いい……」」
流石に此処まで言われると信用するしかない皆だった

「此は貴重なデータですね……」
たった一台（ひとり）――ツッコミも入れずにデータ収集を行なっているトゥエンティ――を除いて……

「んじゃあ……、バトルスタートだ！」
「「なんか口調変わった！」」
バトルがスタートしたというのに突っ込まずにはいられない皆
それ程迄にこのギャラドスの変化に突っ込まずにはいられなかったのだ
「さっさとバトル始めんかおどれら……」
（（しかも怖すぎ……））
こんなんでバトルに集中出来るのか疑問だったが、
「オイラから行くッス！　メガホーンッス！」
大丈夫なようだ
「最初から全開でいくぜ！」
イグニスがそう叫ぶと尻尾の炎が強く燃え上がった

回りに燃え移らないか心配だが

（師匠！　見てて下さい！）

イグニスには師匠がいる。別に死んだ訳では無いのだが

「うおおおお！　インフェルノォォォ！」

イグニスが放った炎、インフェルノは火炎放射や大文字とは比較にならない程の大きさ。まるで業火の龍のよう――

その巨大な業火の龍がヘラクロスへと迫る

ヘラクロスはと言うと、

「凄いッスぅぅぅぅ！！」

見とれていてメガホーンを解除している上に防御の構えすらしていなかった

そして――

「……って熱いッスぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」

「バカだろ……」

直撃した

ヘラクロスは何がしたかったのだろう

因みにヘラクロスは火だるま状態でうつ伏せに倒れている

「バカがいたな」

「バカが居たね」

無表情でそんな会話を交わすライトとアクアだった

この後ヘラクロスはボーマンダのハイドロポンプにより消火されたが気絶していた為、

「勝者はイグニスだ！」

「呆気なかったな……」

もうバトルが終了したのだった

次のカード（組み合わせ）は――

「……貴重なデータが獲られそうです」

「……字が違うよぉ……」

なんか字が違うトゥエンティだった

「じゃあ……行くぞゴラァ！！」

（（また性格変わったよ……））

また性格の変わったギャラドスだった

因みに審判が居ないのは皆気にしない事にした

「ハイドロポンプじゃあ！」

「……」

ハイドロポンプとは言ったものの、あまりにも勢いがありすぎる為
ハイドロポンプには見えなかった

寧ろ水タイプの奥義、ハイドロカノンに見える――

そんなハイドロポンプに対して黙ったままのトゥエンティ

「E－フィールド展開」

そうトゥエンティが呟くとトゥエンティの回りに謎のエネルギーフィールドが展開され、ハイドロポンプを跳ね返した

「んだとぉ？！」

ギャラドスはハイドロポンプを放つのを止めて跳ね返ってきたのを回避する

「……」

黙ったままのトゥエンティ

「厄介だな……畳み掛けるか……」

そう呟くギャラドス

「アクアテール！」

その巨体からは想像出来ないスピードで接客しアクアテールで叩き潰そうとするが、

「……」

無言で避わすトゥエンティ

そこから、

「……静かなる破滅（サイレント・ルイン）」

と呟くトゥエンティ

「な、なんだ？！」

咄嗟に離れるギャラドス

だが

「……なんもねぇな……」

特に変わった事は起こらなかった

「ハッタリか……」

だがこの後、サイレント・ルインの恐ろしさを知る

「ハイドロポン……」

ギャラドスはハイドロポンプを放とうとするが、

「なんだ?!　技が出ねぇ……?!」

おかしい。

先程まで放てていたハイドロポンプが放てていたのに急に放てなくなる訳がない

別段凄く疲れている訳でもない

「相変わらずエグいな……」

そう呟くライト

「いったいどういう事だ……?」

なにがなんだか分からないギャラドス

「説明しましょう」

此処で遂にトゥエンティがバトル中で言葉を発した

「私の放った静かなる破滅(サイレント・ルイン)はと、ナノマシンです。そのナノマシンをあなたの体の中に送り込んでおきました。通常ポケモンの体には、技を出すための器官があります。ポケモンはその器官のエネルギーを使って技を自由に出せるのです。しかし・・・ナノマシンは技の

発生源である器官に入り込み、その器官の構成元素を取り込み、自身のコピー増大させて・・・あなたの器官を内側から破壊しました」

「つまりは……技が使えないって事だな？」

「その通りです。三日程技が使えないでしょう」

ナノマシン、詳しい説明は事情により省かさせて頂くが見えに見えないものなので対象のしようが無かった

「これで私の勝ちです」

無表情だが勝ち誇ったような感じのトゥエンティ

だが、

「……ハハハハハハハ！！」

ギャラドスは笑っていた

「技が使えない……ねぇ……。バカか」

笑っていたギャラドスだが急に険しい顔になる

「技が使えないからどうした？！　技が使えなくともなぁ！」

ふとギャラドスが消える

トゥエンティが気が付いた頃にはギャラドスがトゥエンティを締め付けていた

「力ずくっつー方法があるんだよ」

ミシミシと悲鳴をあげるトゥエンティの身体

「……成る程」

「相手が完全に倒れてこそ、本当の勝利だ」

「……野蛮ですが、私の負けですね……」

こうして負けを認めたトゥエンティ

そんなに熱くないバトルだったが、得る物は大きかった

只今の勝率、互いに一勝一敗――

第九話　Ｃｙｂｅｒｎｅｔｉｃ　ｆｉｌｅ　バトル前編（後書き）

今回熱くないのは……もう触れないで下さい（汗）

その代わり次話の後半は滅茶苦茶熱いバトルを執筆しますので

ボーちゃん↑

「待っててね～♪」

次話はボーちゃんの出番だよー

ボーちゃん

「あいさ～♪」

因みに出番が無かった間は何してたの？

ボーちゃん

「ん～♪ガブリアスに襲われてた♪」

ちょっとまてぃ（汗）

第十話　Cybernetic file　バトル中編（前書き）

今回は……

ガブリアス
「わ、私です……」

ガブリアスのバトルです
さあいったいどんなバトルを魅せてくれるのか？！

（多分）必見です

ガブリアス
「……（多分？（汗））」

気のせいだw

第十話　Ｃｙｂｅｒｎｅｔｉｃ　ｆｉｌｅ　バトル中編

只今の勝敗、互いに一勝一敗――

互いに譲れないバトルになっている

緊張した空気のみがこの現状を漂っている――かに見えた

「……次に出会いバトルを申込まれたら確実に全てを……」

なにやらギャラドスの『あの言葉』で勘違いモードに走っているのが一人いた

まあ其は無視するとして、

「次は僕が行くよ」

出てきたのはゼニガメのアクア

見た感じひ弱そうな彼だが……なにかを持っている――そんな雰囲気を出していた

そんなアクアと対峙するは――

「……わ、私行きます……」

ボーマンダが（絶対意味を理解していない）告白をＯＫした相手、

ガブリアス
今は女の子モードのようだ
いや決してガブリアスがオカマという訳では無いのだが

「……それでは！　アクア対ガブリアスのバトルを始める！　レディー……ゴー！」
ギャラドス審判の元、バトルが始まった
そして皆はもうギャラドスの性格変化にツッコミを入れるのを止めたらしい

「僕から行かせてもらうよ！　水鉄砲！」
様子見なのだろうか、アクアは水タイプ技の中でも初歩的な水鉄砲を使って来た。だがその水鉄砲はガブリアスの予想以上に早かったが、
「甘いですよ！」
ガブリアスはその水鉄砲をただ普通に切り裂いた
「……中々のパワー。直撃なんてしたらひとたまりも無いね……」
今の一瞬で近距離戦では勝ち目が無いと判断したアクアは頭の中で

中、遠距離でガブリアスを倒す策を練り始める

「私から行きますよ！　ドラゴンクロー！」

ガブリアス種特有のスピードで接近しドラゴンクローをアクアに決めようとする

だがその速さは尋常ではなく周りの空気が間髪入れずに切り裂かれていく音がする

アクアは頭の中で策を練りつつも攻撃に備えていたが、

「速い！　守る！」

ガブリアスのあまりの速さに避けきれないと感じたのか、目の前に緑色のバリアを張り攻撃を無効化する

（僕の予想を大きく上回る早さ……、だったら……！）

アクアは何か策を思い付いたようだ

「……」

アクアは無言で口から黒い霧をガブリアス目掛けて吐き出す

「……」

だがガブリアスは視界が遮られたにも関わらず慌てず騒がずに冷静に考えていた

（……黒い霧、なら次の手は奇襲か、其とも……）
と、アクアが次はどんな手で攻めてくるか考えていた
少し考えた後、
「……よし」
どうするか決めたようだ
「行きますよ！　砂嵐！」
ガブリアスは黒い霧を砂嵐で全て吹き飛ばした
すると其処には、

数え切れない程の大量のアクアがいた
「私の詠み通り！」
だがその大量のアクア達は砂嵐により消えていった
大量のアクア達は身代りと影分身で作った偽物だったのだ
（残った一体が本物！）
と、辺りを見回し本物を探したが――
「居ない？！」

そう、砂嵐で吹き飛ばしたアクアは全て偽物だった

――なら本物は一体……？

その瞬間、地面からアクアが飛び出し、ガブリアスにアクアテールを決めた

「え？！」

急な事に反応出来なかったガブリアスは直撃し、吹き飛ばされた

「……全部偽物とは、思わなかったでしょ？」

なんとも嫌らしい笑みを浮かべるアクア

余程自信があったのだろう

「だけどその攻撃、自分の身を殺める事になるとは予想した？」

「？」

ガブリアスはニヤリと笑い――

「地震！」

大地を思いっきり踏み鳴らし、地震を起こした

するとさっきまで目の前にいたアクアが消え――

「あぐっ……」
地中から――アクアが飛び出して来た
この瞬間をガブリアスは見逃さなかった
「ドラゴンダイブ！」
「しまっ――」
そしてアクアは頭から地面に叩き付けられ、気を失った

――其から数時間後――
「うぅ……？」
目を覚ましたアクア
「目が覚めましたか……？」
其処にはガブリアスや他の皆もいた
「此処は……バトル、フィールド……そっか……僕……負けちゃったんだね」

少し残念そうな表情をするアクア

「そうだ。なんであの時本物の僕が地中にいるって分かったの？」

確かに

一体何故分かったのだろう。

「あの時、身代りのアクアテールがバトルの最初に本物の貴方が放った水鉄砲より威力が低かったからですよ」

「……そんな筈は……」

「身代りが使った技は威力が本物の方が使った技より威力が下がるんですよ。ましてや水鉄砲とアクアテール……、アクアテールの方が威力は上。水鉄砲より下になるなんてまずあり得ませんから。あり得るとしたら……身代りが使った時ぐらいです。其処から推測して、本物の貴方がもし空にいるなら既に攻撃してきている。でも空からは来なかった。なら残る答えはただ一つ、地中しか無いと……」

完璧だった

ガブリアスの言う通り、身代りというのはその者の体力を削り分身を作り出す事。だがその分身は見た目は同じでもパワーやスピードに本物より差が出てしまう。だからこそ身代りの攻撃を受けた事で身代りだと分かったのだ

「……完敗だよ」

負けたのに清々し表情（かお）のアクア――

彼もこのバトルで何か得た物があったようだ

第十話　Ｃｙｂｅｒｎｅｔｉｃ　ｆｉｌｅ　バトル中編（後書き）

さあ皆様、次回はいよいよ……

ボーちゃんの出番ですよｗ

ボーちゃん
「頑張るよ～♪」

さあボーちゃんは彼に勝てるのか?!
此所にある資料を見る限り殆どチートキャラのライト
まあボーちゃんもチートですがｗ

ボーちゃん
「楽しみに待っててね～♪」

第十一話　Ｃｙｂｅｒｎｅｔｉｃ　ｆｉｌｅ　バトル後編（前書き）

コラボバトル後編！

遂にライトＶＳボーマンダの対決時です！

お楽しみ下さい！

第十一話　Cybernetic file　バトル後編

前回のバトルでガブリアスが奮闘の末、勝利した

只今の勝敗、
ライトチーム一勝二敗
ボーマンダチーム二勝一敗

という成績になった

ライトチームは、この最後のバトルに勝ち引き分けに持ち込まねば……負け

ボーマンダチームはそのライトチームから逃げ切る（勝つ）事が出来るのか？

「……やっと俺の番か」

腕をポキポキ鳴らしながらバトルフィールドに歩みを進めるライト

錯覚なのか、何やら黄色いオーラが彼を包んでいるように見える……

そんなライトに対するは――

「楽しみだなぁ～♪」

皆様も待ちに待ったであろう――ボーマンダ、

だが全くと言っていい程緊張感が無さすぎる

まるで某ピンク親方様のようだ……

「其では此より！　ライトとボーマンダのバトルを始める！」

ギャラドスの声に両者――とは言ってもやっているのはライトだけ

だが――睨み合う

互いに底が知れない――故に、どうなるのか全く予想がつかない

そして――

「レディー……ゴォー！」

遂にそのバトルの火蓋が切って落とされた

「先手必勝！　電光石火！」

ライトがギャラドスの声と共に先生を仕掛けた

だがボーマンダは、

「……」

目を瞑ってその場に立っている

なにをするつもりなのだろうか……

「貫ったぁぁぁ！」

電光石火が決まる――その瞬間、

ライトがボーマンダの目の前で動かなくなった

いや、動けなくなったというのが正しいのかもしれない――

「……甘いよ♪」

なんと、ボーマンダはライトを電光石火が直撃する直前に掴んだのだ

「ぐっ！　離せっ！」

ライトは必死にもがくが、ビクともしない

だがボーマンダは

「やだ♪」

と言いながら技を放つ

「ちょ……」

――零距離からの龍の波動――

掴まれていたライトは逃げられるはずもなく直撃し、吹き飛ばされた

「いってぇ……。やりやがったな！」

だが平気そうにピョン。と立ち上がり十万ボルトを放つ

「おお～♪零距離から受けてピンピンしてるなんて凄いね～♪」

なんて言いながらボーマンダはドラゴンクローで十万ボルトを空へ打ち上げる

（コイツ……強ぇ！）

一人心の中で燃えるライト

「なら此はどうだ？！　影分身！」

そういうとライトが二人、四人、八人と増えていく。少しすると数え切れない数になっていた

「わぁお♪」

「行くぜ！　放電！」

ボーマンダはその数の多さに目を見開いていた為に放電への反応が遅れてしまった

黄色い稲妻がボーマンダを包み込む……と思いきや

放電はボーマンダに命中することは無かった

「は？！」

いったい何故だ。

だが答えはあっさり判明した

「ただ守るを使っただけだよ～♪」

ボーマンダはただ守るを使っただけだと言う。

どうも何か裏があるとしか思えないが……

「やっぱりバトルはこうでなくちゃな！　十万ボルト！」

ライトは影分身を解き十万ボルトをボーマンダに向かって放った

「当たらない当たらない♪」

ボーマンダは其を冷静に再びドラゴンクローで空へ打ち上げる。が、さっきまで目の前にいたライトが居なくなっており――

「……零距離からなら、避ける事も出来ないだろ？」

ボーマンダの身体にポン、と手を起き、雷を放った

「あ〝〜〜〜〜〜〜」

ビリビリと痺れるボーマンダ。攻撃を受けているのに遊んでいるようにしか見えないのは気のせいだろうか

「効いてねぇのか？！」

「いや〜♪今のは痛いよ〜♪」

明らかに平気そうなボーマンダ

「まあいいや♪大文字♪」

ボーマンダはまるで気にしてないように大文字を放つ

「ちょまっ！」

ライトは高速移動と電光石火を巧みに使いギリギリ大文字を回避。目標を失った大文字はそのまま何処か遠くへ大の字に焼き付くしながら飛んでいく

「あっぶねぇ。あんなの喰らいたくねぇからな」

冷や汗を足らしながら再び構えるライト

「もう遠距離は通用しないみたいだね」

そういうと尻尾に力を込め始めるボーマンダ

「くっらぇ～♪ドラゴンテール！」

相変わらずその巨大から想像出来ない程の速さで近付き頭に叩き付けようとするボーマンダ

「へっ！　なら俺はアイアンテールで勝負だ！」

ライトも負けじとアイアンテールで応戦、衝撃波が辺りに走る

「このままじゃ押し負けちゃうなぁ」

相変わらずのにこにこ顔で呟くボーマンダ

「ぬおおおりゃあああ！」

気合いを入れて更に力を入れるライト。そして――

「せいやぁ！」

なんとボーマンダを吹き飛ばしたではないか

「おおお？♪」

何故か吹き飛ばされた事を喜んでるボーマンダ

「もう一発！」

いつの間にか回り込んでいたライトがもう一度アイアンテールを決めようとする

「残念♪」

だがその隙にライトの腹にドラゴンクローを決めた

「がはっ……」

アイアンテールが解除され地上に叩き付けられるライト

「今のは危なかった～♪流石に二度も貰っちゃあキツイからね♪」

化物か――この場に居合わせた者達は皆一瞬そう思ったという

「ぐっ……」

それでも立ち上がるライト

「なら……俺の取って置きを見せてやる……！」

そういうやいなや力を溜め始めるライト

なにやら雷が一本の槍のような形状になりつつある

「喰らえ！　雷神・インドラ！　三億ボルト！」

そしてライトはその雷の槍――インドラをボーマンダ目掛けて投げた

「――」

ボーマンダは喋る間もなく直撃した

そして煙が発生した

――流石に無事ではいられない――

皆当然のようにそう思っていた

インドラを使用した本人、ライトも手応えはあったと実感している

だが煙が晴れると其処には――

「や♪」

笑顔を見せているボーマンダの姿があった

「んなっ……」

皆は自らの目を疑った

特にライトは衝撃を受けていた

――確かに感触はあった

――なのに何故平然と立っている

避ける暇も無かった筈なのに

そんな心の問いを悟ったのか、ボーマンダはこう答えた

「皆びっくりしてるでしょ？　実はさっきの技が当たるギリギリ直前にアイアンテールで地面に尻尾を突き刺してたんだ♪まあ所謂アースっていうアレのような感じでさ♪」

あの一瞬の間にそんな事を――

本当にこのボーマンダは何者なのだろうか

「それでも大部分はダメージ受けちゃったけどね♪」

よく見れば足が痺れからかダメージから分からないが震えている

「……」

ライトはさっきのインドラに全力を尽くしたらしく、万策尽きた状態だった

「今度はボクの取って置きを見せてあげるよ♪」

「……は？」

そういうとボーマンダの口から蒼い焔が漏れ始める

「いっくよぉ～～～♪大龍波～♪」

――その蒼き焔はボーマンダの何十倍もの大きさを持っていた。そしてその蒼き焔は、ライトを包み込みんだ

――暫くして、蒼き焔が消え去る頃には、地面に倒れ気を失っているライトの姿があった

第十一話　Cybernetic file　バトル後編（後書き）

如何でしたかな？

熱いバトル――になったのか不安ですが、楽しんで頂けたら、嬉しい限りですw

第十二話　Cybernetic file　ちょっとした休息？（前書き）

今回はライト達とは別行動ですが

最早ギャグの塊としか言えませんwwww

地味ーに覚悟してからお読み下さいwwww

それでは……どうぞ！♪w

ボーちゃん

「～♪」

第十二話　Cybernetic file　ちょっとした休息？

ライト達とのバトルに勝利したボーマンダ達

「おおお！　この木の実美味そうッス！」

「それはモモンの実ですよ。甘くて美味しいんですよ～♪」

バトルを終えた今は木の実採取をしていた

其は遡る事数分前の事――

ボーマンダとライトのバトルが終わった後トゥエンティが大量の木の実を抱えていた。そしてその木の実で皆仲良く（？）食べていた所をみていたボーマンダ達は、

「ボクにも一つちょーだい♪」

とお願いしてみたら、

「どうぞ」

あっさりと貰えたのだった

……ボーマンダとガブリアスだけ

無論ヘラクロスとギャラドスは納得出来る筈がなく抗議するが、「貴方達には興味はありません」の一言であしらわれた

ヘラクロスとギャラドスには全くもって意味不明すぎて理解出来なかったが

だがその時、「どうせなら皆で食べに行こ〜♪」というボーマンダの提案で木の実の沢山ある場所をトゥエンティに教えてもらいその場所に向かった――というやり取りがあって今に至るのだった

「此処には木の実がいっぱいありますね〜♪」

そう一人声を漏らしたのはガブリアス

背中に背負っている木の実を入れるかごが無駄に似合っているのは気のせいではない

「うんうん♪しかもここの木の実美味しいし♪」

ガブリアス続いてボーマンダも声を漏らす。器用にも頭にかごを乗せて其処に木の実を放り込んでいるからこれまた凄い。周りから「何者だ……」とか「おお！　神よ！」とかツッコミなのか分からないツッコミが飛んできていたりするのだが

「気合い入るッス〜♪」

なんて言っているヘラクロスだがそのかごの中身は他の誰よりも一番入っていなかった

「僕採取出来ないけどね……」

だが一人小声でそうギャラドスが呟いていた。――ならお前はどうやってそのかごを持っているんだ――というツッコミは聞き流してほしい。出来れば突っ込まないでほしい

「まるで天国ッスね！」

そのヘラクロスの言葉にギャラドス以外が賛同した

だが、この後地獄を見ることになるとは誰も知るよしもなかった

「うおおお！　こんなでっかい木の実見たこと無いッス！！」

一人少し遠く離れたところでいきなり声をあげるヘラクロス。その声を聞き付けて全員ヘラクロスの元へ駆け付ける

ヘラクロスがその手に持っていたのは――

「これッス！」

黄色い……蛹だった

しかも顔がある。その上後ろの木に数え切れない程の数がぶら下がっている

「ちょ……それは……」

「なんスか？」

信じて疑わないヘラクロス

ツッコミをいれたくてもいれられない

そして――

その蛹は光り始めた

「を？」

じーっと見つめるヘラクロス

皆は今すぐにでも逃げる状態をしている

光が収まる頃には、

「……へ？」

蛹は成虫へと「進化」していた

「スピー！」

その上、後ろの木にぶら下がっていた全ての蛹も成虫へと「進化」していた

「……まさかとは思うんスが」

「……そのまさかなんですが」

そう、先程ヘラクロスが持っていたのは、コクーンという蛹の虫ポケモン。そして今目の前にいるのは――

「スピスピー！」

「「スピー！！」」

そのコクーンの進化系、スピアーだった

「逃げろおおぉぉぉぉぉ！！！」

全員全速力で走る走る

それをスピアー軍団も全速力でボーマンダ達を排除しようと追いかける

「なにやってんですかあああぁぁぁぁぁぁ！」

「知らなかったッスぅぅぅぅ！！」

「……」

「あはは～♪」

超が付くおバカを注意する者が一人。其に対して必死に弁解する者が一人。更に其を見て呆れている者が一人。そして、明らかにこの状況を楽しんでいる者が一人

「鬼ごっこは楽しいね～♪」

「「違うわあああぁぁぁぁぁぁ！！」」

ボーマンダへの全員から（スピアー含む）の激しいツッコミは地平線の彼方まで響いたという

第十二話　Cybernetic file　ちょっとした休息？（後書き）

がぶりん↑
「ちょっとおおおぉぉぉぉぉぉ？！」

徐々にがぶりんがツッコミ役になりつつありますｗｗ

がぶりん
「ていうかなんですかこのオチはあああぁぁぁぁぁぁぁ！　追いかけられたまま終わらせないで下さいよおおぉぉぉぉぉ！（涙目）」

そんな涙目で迫るなぁぁぁぁぁｗｗ
俺の理性がヤバいｗ
そっちこそ旦那さんと戦えばいいだろうがｗｗ

がぶりん
「まだ結婚式挙げてませんからあああぁぁぁぁぁぁ！」

ほうｗｗ
挙げる予定はあるんだね？

がぶりん
「はい……6月に……って何を言わせるんですかあああぁぁぁぁぁ！／／／／」↑顔真っ赤

あんた叫んでばっかだなｗｗ

がぶりん
「誰のせいですかあああぁぁぁぁぁ！（泣）」

ｗｗｗ

がぶりん

「あうぅ……６月に挙げる事ばらしちゃった……」

※結婚式は行われませんのでご注意を

第十三話　Ｃｙｂｅｒｎｅｔｉｃ　ｆｉｌｅ　バカカブト虫の底力（前書き）

やっと更新
というより木の実編後編だけどｗｗ

まあ楽しんじゃって下さい！

第十三話　Ｃｙｂｅｒｎｅｔｉｃ　ｆｉｌｅ　バカカブト虫の底力

前回、ヘラクロスがバカをやらかしたせいでスピアーの大群に追われているボーマンダ達。

「速くなんとかしてよ～！」

ギャラドスは走りながら、元凶のヘラクロスにどうにか対処しろと言う。

「わ、分かったッス」

完全に自分に落ち度がある為、反論出来ないヘラクロスは走るのを止めてスピアーの大群へとその身体を向ける。

「もう力ずくで止めるッス！　高速移動、そして燕返しッス！」

ヘラクロスはまず高速移動で自らの素早さを上げ、更に燕返しでスピアーの大群に攻撃する。

元々燕返しというのは目にも止まらぬ速さで攻撃する技。そこに高速移動が加わり更にその速さは加速し、影も着いていけぬというぐらいの速度になっていた。

その速さにスピアー達は対処出来ず、大半が駆除されていった。

スピアー達は仲間がやられた事に更に怒りを覚え、ヘラクロスに反撃しようとしたものの、やはりその速さに着いていけずに、間髪入れずに、また一匹、また一匹と駆除されていく。

だがやはりその数は尋常ではない為、倒しても倒しても増え続けていた。

「くそっ！　キリがないッス！」

ヘラクロスは倒しても倒しても数が減らない事に少し苛立ちを覚えながらも次々スピアー達を駆除していく。

流石にスピアー達の群れをたった一人で相手をするには相当体力が減って、ヘラクロスが疲れて始めた頃、スピアー達はそのヘラクロスの強さとタフさに恐怖を覚え次々と逃げ始めた。そして数秒もしないうちにスピアー達の大群はいなくなっていた。

「や、やっと終わったッス……」

やっと撤退した事で安心するヘラクロス。

「お疲れ様〜」

そこにガブリアスがやって来てその苦労を労う。

「これをどうぞ。体力が回復しますよ」

ヘラクロスはガブリアスから渡された木の実、オボンの実をその手に取り、口へと運び、一口かじる。

「う、美味いッスぅぅぅぅ！」

相当疲れていたのだろう。今にも発狂しそうなぐらいの声で叫ぶ。

「ふぇぇ……耳がぁ……」

ガブリアスはヘラクロスのすぐ隣に座っていた為、大声を至近距離で聞いていた為耳を守る事が出来なかった。

そんな事に気付かず、ヘラクロスは食べ進めていく。

そしてオボンの実を食べ終え、

「美味かったッスぅぅぅ！」

と叫ぶ頃には、ガブリアスが隣でピヨピヨになりふらふらしていた。俗にいう混乱状態である。

「ありゃりゃ～♪」

何故かその状況を楽しそうにしているボーマンダ。

「あり？　どうしたんスかねぇ……」

自分のせいだとはつゆしらず、ガブリアスをじっと見るヘラクロス。

「ん～♪」

そんなガブリアスをそっとおんぶするボーマンダ。ガブリアスが起きたら大変な事になりそうな予感がする……

「戻ろっか♪皆の所に♪」

そうヘラクロスに提案し、低空飛行でライト達の元へと向かうボーマンダ。

「ま、待ってくれッスぅー！」

そんなボーマンダを慌てて追い掛けるヘラクロス。

このあと戻る途中でガブリアスが目覚め、今の自分の現状を理解して真っ赤になった後大量の湯気を出しながら気絶したのは言うまでもない。

そしてライト達の所へ戻ると、

ライト達の隣には、見慣れない、リオルが居た。

第十三話　Cybernetic file　バカカブト虫の底力（後書き）

この続きは、アブソル様の「サイバネティック・パートナー」を御覧くださいまし。

第十四話　謎めいたポケモン（前書き）

久しぶりのボーちゃんズ更新

これまでのつながりはアブソルさんのをご覧下さい～↑こら

色々と急展開すぎるのはスルーで（汗）

今回は超重要キーワードが……

第十四話　謎めいたポケモン

先程、壮絶な戦いを繰り広げたボーマンダ達とライト達。
一応、勝利という形に終わったのだが……

その代償は、あまりにも大きかった。

ボーマンダは、なんであんなに軽々と「命」を消せるのか、と何度も何度も自問自答していた。

ライトは、仲間を、操られていたとは言え、殺す寸前までに追いやってしまった事、そして

自分のせいで、トゥエンティがボロボロになってしまった事に悔やんでいた。

そのトゥエンティは、文字通りボロボロだった。

片腕は完全に失っており、失っている部分から色々なコードが見えており、改めてその身体が機械という事を嫌でも認識させる。

残りの皆も、操られていたとは言えども、やはり仲間を傷付けた事

を悔やんでいた。

暫く、この場には重たく、暗い沈黙が続いた。

そしてただ、時間だけが過ぎていった――

それから暫くして、ボーマンダ達とライト達はなんとか立ち直り、

「……また、バトルしようぜ！」

「うん♪」

強く、長く、この出会いを忘れないように、しっかりと握手を交わし、ライト達はジム戦へ、そしてボーマンダ達は……世界の何処かへ眠るプレートを探す旅を再開した。

そんな時、別の場所にて――

ヤミカラス達がガアガアと騒ぎながら薄暗い森を飛び回る中、一人のポケモンが歩いていた

「……うるせぇなぁ。」

黄土色よりかは少しばかり黒い身体
膝や額から突き出た刺
そして極めつけはその目を釘付けにする分厚い青い頭蓋骨

そのポケモンはラムパルドと呼ばれ、大昔から存在するポケモンだ

「……全く、叩き潰してその声を鎮めてやろうか……？」

その見た目に違わぬ、かなり荒っぽい性格のようだ

「ガァァァァ！」

すると、ヤミカラス達の向こうから一際けたたましい声が響き渡ってきた

その正体は、ヤミカラスが進化した姿のポケモン、ドンカラスだった

どうやらこのヤミカラス達のリーダーらしい

「おぃおぃおぃ。何故に大将のお出ましかよ……」

「久しぶりのエモノ！」

どうやらラムパルドはエモノとして見られているようだ

「あんだ……？　某と殺るってのか……あ〝あ〝？」

「クワァァァァ！」

雄叫びと同時に飛び掛かってくるヤミカラス達

対するラムパルドはなんの構えもせずに――

「……飯喰わせてやるから大人しくしやがれ！」

と、何処からか調理器具やら食材やらを取り出して料理を始めた

突然の事にヤミカラス達、ボスのドンカラスでさえも唖然としている

数分後、なんとも美味しそうな料理が出来上がった

「……食え」

ドカッ、と座り込み、食すように催促する

ヤミカラス達は恐る恐るその出来上がった料理を口にする

すると、感動の声を上げ泣きながら次々と料理を口に運ぶ。ボスのドンカラスも泣きながら料理を口に運んでいる

「泣くほど美味かったのか……そりゃあよかった」

うんうん、と頷くようにヤミカラス達を見るラムパルド

そんな時、何処からかのんびりとした声が響き渡ってきた

「美味しそうな匂い〜♪」

その後に、のんびりとした声を追いかけるように続けて声が聞こえてきた

「待つッス〜！」

「速すぎですよぉ〜！」

「いや……君等も速いからね……」

もうお分かりだろう。ボーマンダ一行である

どうやらボーマンダが料理の匂いに誘われて此処までやってきたらしい

犬かっ！　とツッコミを入れてはいけない

「騒がしいな……」

ボーマンダ達が騒がしいので追い払おうとするラムパルド。

「此方だ～♪」

「あ、ちょっと――」

そして遂にご対面

その瞬間、ラムパルドはボーマンダを見て一瞬硬直したが、硬直が解けた直後――ファインティングポーズをとった

「どうしたの君～？」

ボーマンダが何時もののんびり口調で訊く

するとラムパルドは嬉しそうに、こう語った

「……拙者は今最高の気分だ。まさかこんな所でお目にかかれるとはな……。ええ？　伝説の銀眼の翠龍さんよぉ！」

第十四話　謎めいたポケモン（後書き）

※補足
銀眼の翠龍はボーちゃんの事です

ボーちゃんの事を知る荒っぽい謎のラムパルド

次話は多分必見です（汗）

ヘラクロス
「多分ッスか（汗）」

第十五話　深まる謎（前書き）

今回は重要だったり重要じゃなかったり←どっちだ

お察しの通り銀眼の翠龍の説明が大半を締めてますが（汗）

元から短いのに更に短いような……（汗）

文章力欲しいな……

第十五話　深まる謎

「銀眼の……」

「翠龍……？」

ギャラドス、ガブリアスとラムパルドが発した謎の単語を部分部分で復唱する

「……十年ぐらい前の話だ」

突如として昔話を始めるラムパルド

「……この世界を脅かす程の最凶の殺し屋集団が居た。その集団を、エターナル・ルインと、民は畏れを籠めてそう呼んだ」

「「！！！」」

エターナル・ルイン

それは、一人一人が数多のポケモン達を抹殺してきた最凶犯罪者達。世界各地で大暴れし、その名を轟かせた人殺し集団。

それが、エターナル・ルイン

「そんな集団が……ある嵐の夜……。たった一人のポケモンの手により、一晩で……壊滅した。此処までは誰もが知ってる話だ。世界

中に報道されたからな」

ラムパルドの言う通り。此処までは、ヘラクロスも、ガブリアスも、ギャラドスも知っていた

「そしてそのポケモンは……次々に盗賊団や強盗団を壊滅させていった。その中で、唯一助かった奴が一言漏らした。『……銀眼の瞳を持った……翠色の……龍……』ってな……。以来、犯罪者共の世界で、銀眼の翠龍と呼ばれるようになり、その驚異を轟かせた……」

話を終えると、息を大きく吸い込み、リラックスするラムパルド

「で、でも……」

「あ〝ん？」

ガブリアスが一歩前に出る

相変わらず乱れ口調のラムパルドに思わず怯みそうになるがなんとか持ちこたえ、

「それがボーちゃんとは限らないのでは……」

少しおどおどしながらラムパルドに反論するガブリアス

だが、ラムパルドには確たる証拠があった

「……拙者はな、見たんだよ。目の前で、このボーマンダが犯罪者共とやりあってる所をな！　んで耳にしたんだよ。コイツが銀眼の翠龍って事をな！」

記憶
それはどんなものよりも確実で確信を得る証拠となりうるもの
ガブリアスは「それでも……」と更に反論するが、ラムパルドの「……某の記憶力は良い方なんだ」の一言で身を引くしかなかった
記憶というのは、他人には分かりにくいものだが、他の何よりも自信を持てるもの
その絶対的自信を感じ取った三人は、最早なにも出来なかった
重い空気が、その場を少しの間だけ、支配する

「……それで？」

今まで沈黙を貫いてきたが、此処で遂に口を開いたボーマンダ
何時もとは様子が少し違っている

「……なぁに、簡単な事だ。伝説の強さをこの目で、この体で感じたいだけさ」
――結局は只のバトルというなんとも紛らわしい事だった
「……分かった。受けて立つよ。でもボクはもう銀眼の翠龍なんて名じゃ――」

「――『天空(そら)の管理者』だろ？」

「？！」

自分が喋っている所を遮られたかと思ったら、今まさに自分が喋ろうとした事を言われ、驚きの表情を隠せないボーマンダ

「テメェの事は色々と調べたからな……」

またもや放たれた謎めいた単語

『天空(そら)の管理者』とはいったいどういう意味があるのだろうか……

そしてこのラムパルドは、いったい何者なのだろうか……

第十五話　深まる謎（後書き）

『天空（そら）の管理者』

多分最重要キーワード……の筈↑こら

まあ大方推測はつきそうですなw

次回こそはバトル……の予定↑こら

第十六話　VSラムパルド（前書き）

ラムパルドとのバトルです

中々盛り上が……る？←こら

第十六話　VSラムパルド

「ドラゴンクロー！」

「気合いパンチ！」

ボーマンダのドラゴンクロー、ラムパルドの気合いパンチ、互いの技がぶつかり合う。その衝撃は周りの木々が揺れ動く程だった

思わず衝撃で飛ばされそうになる三人だが、なんとか持ちこたえて二人に視線を戻す

「パワーが……二人共尋常じゃないッス……」

「次元が違いすぎます……」

「あんなの怪我じゃすまないよ……」

三人は瞬きをするのも忘れ、息を飲み、二人を見続ける

ボーマンダとラムパルド、両者はバトルが始まってからずっと、相討ちを起こしてはを繰り返し、均衡を保っていた

まだ互いの身体には傷一つ付いていない

「ドラゴンクロー……」

ボーマンダがまたもやドラゴンクローでラムパルドに攻め立てる

「単調すぎるぜ！」

そういうラムパルドも、気合いパンチで相殺にかかろうとする

「……クロス！」

同じ事の繰り返しかと思いきや、もう片方の腕も使い、×印にドラゴンクローをクロスさせる。

「んごぉ？！」

二重のドラゴンクローを相殺出来る訳もなく、思いっきり吹き飛ばされるラムパルド。ラムパルドが吹き飛ばされた後の木々は薙ぎ倒されて、ボキッと折れていた。

「……やってくれるじゃねーか！」

ラムパルドは、大きく吹き飛ばされたというのに何事も無かったかのように立ち上がり、ボーマンダに向かって走りながら息を大きく吸い込む。

「吹雪！」

突如ラムパルドの口から吐かれる勢いの乗った大量の雪――吹雪がボーマンダに襲いかかる。

回りの草木や地面は、その吹雪により急激に凍てついていった。

だがボーマンダは――

身構える事も無く、かつ、避ける事もしなかった

その変わり――

「……大文字」

口から大の字に灼熱の炎を吐き、吹雪を蒸発させた

両者は水蒸気に包まれて見えなくなってしまった

「なんも見えねぇな……だが甘い！」

ニヤリと笑い、大地を力一杯踏み鳴らす

「地震！」

地面が激しく上下に揺れ動く

すると――

「……どうだ！」

――地震の衝撃により、発生した蒸気が吹き飛んび、視界が晴れた

しかし、

「……いねぇ。何処に居やがる？」

其処にボーマンダの姿は無かった

辺りをキョロキョロ見回してボーマンダを探すラムパルド。ガブリアス達もつられてボーマンダを探す。

「龍星群」

声が聞こえた方を見ると、空を飛翔して龍星群を放つボーマンダの姿があった

水蒸気が発生した――否、発生させた時から空を飛んでいたのだろう発動までに時間がかかる技なのだが、今まさに放たんとするボーマンダのその姿は既に力を溜めていたとしか思えなかった

当然の如く、ラムパルドは予想していた筈が無く、逃げるタイミングを完全に失っていた。

「うんがあぁぁぁぁぁっ！」

龍星群は次々とラムパルドに直撃する

かと思われた。

良く見ると――

「効かねぇんだよんなもん！」

幾らかはダメージを受けているが、なんということだろうか。ボーマンダの龍星群を、気合いパンチと諸刃の頭突きで破壊しているではないか

「……んな滅茶苦茶な事ありッスか……？」

「流石特性が型破りなだけはあるというのでしょうか……」

「……あの人怖い……」

三人共、開いた口が塞がらなくなる程に驚愕していた

龍星群を放ったボーマンダでさえも、目を丸くして大きく見開いていた

「ボクの龍星群を……凄いねぇ♪」

自然とボーマンダの顔に笑顔が戻る

「この程度で……某がくたばると思うなぁぁぁ！」

龍星群を破壊しながら冷凍ビームと吹雪、両方を放つという荒業をいとも簡単にこなすラムパルド

不意の攻撃にボーマンダは反応出来ず、直撃してしまう

「冷たいなぁ♪」

――ドラゴンタイプ達の弱点の氷タイプの技を直撃したというのに、全く効いているようには見えない

「今のは効いたよ～？♪」

とボーマンダは言うが、全くそういう風には見えない。その場に居た全員がボーマンダを疑っていた

「……まあいい。流石にそろそろ身体もガタが来やがった……」

「ボクも次が限界かな♪」

両者ともニヤリと笑い合う

「諸刃の頭突きぃ！」

「ドラゴンクロー……クロス！」

技と技が激しくぶつかり合う

「んがぁぁぁぁぁ！」

「負けないよ～！♪」

ずっとこの均衡が保たれるかと思っていたが、あまりの衝撃に爆発が発生する

「ど、どうなったの……？」

爆風が晴れると、

「……流石は……天空（そら）の……管理者だ……」

「君も……強かったよ……♪」

フラフラな二人の会話が切れると、その場に立っていたのは……ボーマンダだった

第十六話　VSラムパルド（後書き）

とゆー訳で、ボーちゃんの勝ちですｗｗ

ボーちゃん
「やったよ～♪」

ラムパルドも滅茶苦茶だったんですがねｗｗ

流石ボーちゃんｗｗ

天空の管理者については追々……

それと自分の書いてる全連載小説の感想制限を外しました
読者の皆様も気軽に感想をどうぞｗｗ

第十七話　それでいいのか（前書き）

サブタイトルに特に意味はありませんｗｗ

皆さんもお分かりの通り……はい

まあ本編をご覧下さいｗ

ボーちゃん

「速く速く～♪」

第十七話　それでいいのか

「疲れたぁ♪」

バトルを終え、その場に仰向けに寝っ転がるボーマンダ。
身体の色が自然かなり同化しており翼の赤い色やお腹の模様等が無いと確実に分からなくなっている所だ

「お疲れ様ボーちゃん。これでも食べて♪」

ガブリアスがボーマンダに何かを渡す
それはお馴染みの――アレだった

「わ～い♪アイスだ～♪」

そう。アイスだった。だがなにやら不思議な色をしている。黄色より薄く、妙に青色っぽい――謎のアイスだった
だがボーマンダは気にせず、まずは大きく一口

「このアイス……オレンの実とオボンの実を混ぜ合わせて作ったアイスだね♪」

「凄い……正確ですよ……」

なんと、一口食べただけで何で作ったかを当ててしまったではないか
ガブリアスも驚愕の表情を浮かべている

「……中々起きないッスね」

「だね……」

その頃、ボーマンダの近くで未だに倒れたまま起き上がらないラムパルドをつついているヘラクロス、それを見ているギャラドスが居た

「水掛けたら起きるとか？」

唐突に何を言い出すのかと思えば全くもっておバカな発言を繰り出すヘラクロス

「いやいやいや……。逆にダメージだから……」

そんなヘラクロスに冷静に突っ込むギャラドス

そんなやり取りを繰り返している内に、ラムパルドがゆっくりと起き上がった

「……此処は……」

状況把握の為回りを見渡すラムパルド

そんなラムパルドの後ろでまだ言い争って（？）いる二人を見てラムパルドはフッ、と軽く笑って何処かへ立ち去ろうとする

「待って」

そんなラムパルドに気付いたボーマンダがラムパルドを呼び止める

「……なんだ？」

「ボク達と一緒に、旅をしない？」

ラムパルドに一緒に旅をしないかと誘うボーマンダ

「……某は……」

「ね？　いいでしょ？」

渋るラムパルドに、無意識なのか、それとも狙ってなのか、上目遣いでラムパルドに断る選択肢を削除したボーマンダ

「……ちっ。分かったよ。行きゃあいいんだろ行きゃあ」

半分嫌々だが、僅かに顔を赤めてそっぽを向いて返事をするラムパルド

彼の心にもズキューンと来たのだろう

「わ～い♪」

はしゃぐボーマンダ。

因みに三人は唐突すぎる発言に固まったままでいた

「宜しくねっ♪」

「……ああ」

言ってしまった事はもう仕方がないので開き直るラムパルド

まだ少しツンツンしているが。

この後三人は復活するが異論、異議は無かったという

それから更に明確な時間が分からない程過ぎた頃、

「……暑いです……」

「も……もうダメッスぅ～……」

「もうちょっとだから頑張ろうよ……」

「だらしねぇなぁテメェ等……この程度の暑さでへばるたぁ……なぁ？」

「～♪」

「……拙者の話聞けよ……」

ボーマンダ一行は――何がどうなって何の因果でこうなったのか不明だが、見ゆるは一面の砂、砂、砂。
照り付けるは全てを焼き尽くす程の熱を持つ太陽。
所々で発生する砂嵐。
時々だが見かけるこの暑い中でも大地にしっかりと根を張り聳え立つ巨大な覇王樹（サボテン）。

そう、一行は――永遠に続きそうな砂漠の真っ只中に居たのだった

第十七話　それでいいのか（後書き）

という訳で口調は荒いが一人称が真面目？なラムパルドが仲間にｗ

ラムパルド

「宜しくな……」

因みに覇王樹は漢字変換したらこうなったので即採用しましたｗｗ

ラムパルド

「覇王樹は水分が沢山含まれてるからな。食ったら美味いぞ」

まて（汗）

ラムパルド

「某が調理してやる」←出刃包丁等準備

……（汗）

第十八話　アイスに隠された秘密（前書き）

今回は～……

サブタイトルから分かりますように……はい。長き？に渡った秘密が解き明かされます。

少々ボーちゃんの過去も混じりますので、混乱しないようにお願いします……

では……どうぞ！

ボーちゃん
「アイスアイス～♪」

第十八話　アイスに隠された秘密

なんの因果か、というより本当になにがどうなってなのか、不明すぎる点を残したまま灼熱の砂漠へとやってきたボーマンダ一行。
ギラギラと照り付ける日射しに皆ヘトヘトに――

「アイス美味しい～♪」

「ですねぇ♪」

「日陰最高ッス！」

「水って素晴らしい……」

――なってはいなかった

「しかしよくもまぁ都合よくオアシスが見付かったもんだなぁ。ええ？」

今ラムパルドが言った通り、なんとも都合よくオアシスが見付かったのだ。
なので皆でオアシスで休息中。

ボーマンダとガブリアスはアイスを食べ、ヘラクロスは日陰で寛ぎ、ギャラドスは水の中で丸まって、ラムパルドは……何かを調理しているようだった。

「そういえば……ボーちゃんは何故そんなにアイスを持ってるんですか？　そもそもなんでアイスが溶けないんですか？」

遂に作者の皆様も読者の皆様もお待ちかねの疑問がガブリアスの口から持ち掛けられた。
此まで幾度も見てきたアイス。それを平然と食べているボーマンダ。そもそも何故アイスなのか。沢山の疑問がぶつけられる。

「それはオイラも知りたいッス！」

「確かに……」

「ある種最大級の謎……だな」

次々に反応する仲間達。
当の本人、ボーマンダはというと、

「～♪」

聞いてるんだか聞いてないんだか分からない状態で美味しそうにアイスを頬張っていた。

「「……」」

お約束の展開に苦笑いしか出来ない。
だがどうしても気になった。一度気になったらとことん知りたい。
そんな知的欲求が突き動かした行動が――

「……さっきの質問全部に答えたら、覇王樹（サボテン）で作ったアイスをやるぞ？」

ラムパルドの必殺の一言（いちげき）

ボーマンダはこの一言に「分かった～♪」と先読みしてたんじゃないのかぐらいの速さで即答して、語り始めた

「まずはなんでボクがアイスを食べ始めた事から話すね。ボクがアイスを食べ始めた理由、それは――

当時のボクはまだまだ子供だった。進化する前の前、一番最初の段階、タツベイの頃。子供だったボクは色んなものに興味深々だった。何時もその時中のよかった友達たちと探検したりつまみ食いしたり……色々とやんちゃしてたんだ♪

そんなある日の事、何時ものように遊んでいたら……

「ねぇねぇ、皆『あいす』って知ってる？」

「『あいす』？　それってなぁに？」

「なんかね～、すっごく美味しい食べ物なんだって！」

「「へぇ～！」」

友達の一人がそんな情報を持ってきたのがキッカケ。
その日からボク達は『あいす』という未知の食べ物を探しに探して回った。
何時しか遊ぶ事も忘れて『あいす』を探す事が全てになっていった。
ボク達の話を聞いた大人達や家族達も探す事を手伝ってくれた。
まだ見ぬ新たなものを目指してね。

でも幾ら努力しても見付からなかった。

ただ平然と時が過ぎ、ボクはタツベイからコモルー、そして今、ボーマンダになった。
友達も皆、進化して、大人達や家族達も色々と忙しくなった。そして『あいす』を見付ける目標すら、誰しもが忘れていった。

そんなある日の事だった。

あの『事件』は起きたんだ……

目の前で次々殺されていく大人達。仲間達。親友達……

焼き裂かれ、破壊されていく家屋。

それは積み上げてきたもの全てが一瞬で無くなっていく光景

ボクは泣き叫び、怒った。

誰も守れない無力な自分を呪いながら、殺戮者達に立ち向かった。

それから暫くの間の事は覚えてない……

目が覚めると、今まで殺戮と破壊を繰り返していた者達が倒れていた。

何故今の今まで暴れていた者達が目の前で地面にうつ伏せているのか分からなかったけど……この惨劇が夢でなく、現実である事だけは理解出来た。

ボクは途方に暮れた。

住む場所も、信頼出来る友達も、家族も、全て失ってしまったから……

途方に暮れてる時、全く見知らぬ場所に佇む店を見付けた。
ボクは何となくその店に入った。

その時、大きく店の中に書かれていた、『アイス』という三文字
ボクは目を疑って何度も何度も確かめた。

そしてそれが昔に探してた『あいす』だと分かった。

ボクは何かに取り付かれたようにアイスを購入し、一口食べてみた。

その瞬間に広がる甘味。そして織り成す冷たさ。
ボクは感動のあまり涙した。
それと同時に後悔もした。
こんなに美味しいものを皆で食べられなかった事を……

以来、ボクは色んなアイスを食べ回った。
何時しかアイスと木の実ぐらいしか食べられなくなったけど、どうでもよかった。ただ、ひたすらにアイスを求め続けたんだ――

だからボクは今も沢山のアイスを食べ続けてるんだ。殺されていった親友や家族、全ての人達の為にね。笑顔で美味しく食べていれば、天国(てん)にいる全ての人達に美味しさが、伝わるかもしれないからね……」

ふぅ、と一息つくボーマンダ。
さぞお疲れのようだ。

話を聞いていた皆はというと、ヘラクロスが、ガブリアスが、ギャラドスが、ラムパルドが、全員が涙していた

「そんな秘話が……」

「うぅ……立派です……」

「涙が止まらないッス……」

「たかがアイス、されどアイス……。皆の為にそのアイスを食べ続ける……か……良い話じゃねぇかバカヤロー……」

もう皆顔がぐちゃぐちゃになるぐらい泣きまくっていた。
ボーマンダは恥ずかしそうにしているが、過去を思い出し、悲しそうな表情もしていた。

暫くして、やっと（特にガブリアスが今の今まで泣いていた）泣き

止んだ四人。

とりあえずこの空気をなんとかしたいと思ったボーマンダは、懐から何かを取り出す。

「それは……？」

「これは『永久氷』っていって……何があっても、どんな状況下にあっても溶ける事の無い氷なんだ。」

ほら、と言いながら火炎放射を当てたり、太陽に晒したり、水に入れてみたりしたが、全く溶ける事は無かった。

逆に砕こうとしても、氷が発する冷気があまりにも凄まじい為にそれも不可能だった。

この『永久氷』の効果によってアイスが溶ける事はなく、何時でも何処でも新鮮なままのアイスを食べていた。という事になる。

恐るべし……

全ての質問に答えたボーマンダは、ラムパルドが作った覇王樹アイスを早速口にした。

緑色をして若干刺々しい覇王樹アイスを頬張るボーマンダ。

その表情は無論飛びっきりの笑顔。

「ん～、冷たくて美味しい～♪」

今日もボーマンダは、アイスを食べ続けるだろう。天国（てん）に居る仲間達の、親友の、家族の為に、笑顔で――

第十八話　アイスに隠された秘密（後書き）

されどアイス、たかがアイス。そんなアイスが織り成す今回の話……
如何でしたかな？
大袈裟と思うかとしれません。おかしすぎるかもしれません（汗）
まあでもそこはご愛嬌で……

ボーちゃん
「アイス美味しいな～♪」

以上、アイスに纏わる秘密でしたっ

第十九話　救出！　そして……（前書き）

やっとこさぁ（汗）
テストやら検定やらで忙しくって（汗）

一段落した……と思いきや暑さの地獄で中々執筆出来ずのループ……（汗）

昨日は映画を見てきましたけどｗｗ

さて、遅くなりましたが、どうぞ！

第十九話　救出！　そして……

ボーマンダのアイスに纏わる話がされてから数時間が経過していた。

「あ、暑いッス……」

一行は、オアシスを出発し、砂漠の中にあるという街を目指していた。

先程のアイスの話の件は皆心の奥にそっとしまって置く事にて解決。再び旅を再開したのだった

「あ、後どれぐらいッスか……？」

暑さでヘトヘトのヘラクロス。横を見ると干からびかけのギャラドスがいた。今にも魂が昇天しそうだ。

「僕も……知りた……い……」

声がカスカスで力がない。ホントに昇天しそうだ。

「えっとですね……。後二、三キロぐらいですね……多分」

「多分ってなんスか多分て……」

曖昧な発言に一応ツッコミを入れるヘラクロスだが、もうヘラクロスからのツッコミは街に着くまでないだろう。

「見えるのは砂と……暑さで歪む景色ぐらいか……」

ラムパルドが一人呟く・・・・・・自前の包丁を磨ぎながら。

「さっきから……雨乞いしてるのに雨降らないし……」

最早干物同然のギャラドスが必死に雨乞いをしながら言う。
正直な話今にも死にそうなギャラドス。

「……？　あれはなんでしょう……？」

揺らめく景色の中、ガブリアスが何かを見付けて指差す。

「どれ……？！　誰か倒れてやがる！」

「それってヤバいんじゃ……」

「急ぐぞ！」

ボーマンダ達は、暑さも忘れ（ギャラドスに至っては死の淵から帰還して）、太陽がギラリギラリと照り付ける砂漠の中で倒れている謎のポケモンの元へと走り急いだ。

「お～い。だいじょ～ぶ～？」

全く緊張感の無い声で意識があるかを確認するボーマンダ。
そのポケモンは狐のような姿をしていて、黒色を基調としていた。
そのポケモンはうんともすんとも言わなかった。

「意識は無いみたいですね……。でも心音は聴こえるから生きてる事は確実ですね……」

「この子かなり熱いよ～？」

「そら熱くて当然だ。寧ろ不味すぎる。元々黒色というのは熱を持ちやすい色だ。それがこんな糞暑い砂漠の中だぞ？　脱水症状はまず確実に起きている。速く応急処置でもなんでもしねぇと……命に関わるぞ……」

なにやら作業をこなしながらこのポケモンの置かれた状況を説明するラムパルド。

「じゃあどうすればいいんッスか……？」

自分達に出来る事はなんなのか、それを尋ねるヘラクロス。

「まずは水だ。ありったけの水が欲しい。それと日影のある場所も欲しいが……こんな砂漠の中に日影のある場所なんてな――」

「日影あったよ～♪」

ボーマンダの声が聞こえる方を見ると、巨大すぎるヤシの木がそこに堂々と力強く聳え立っていた。

「……願えばなんとかなるもなんだな」
一人呟きながらボーマンダの元へと向かうラムパルド。それに続きギャラドスとガブリアス、ヘラクロスも移動する。

「……日影は確保、次は水だな。ギャラドス、てめえハイドロポンプは使えるか？」
ラムパルドの問いに頷くギャラドス。
「ハイドロポンプを……そこら中に撃って撃って撃ちまくってくれ。少しでも辺りの温度を下げたい。」
「分かったよ！」
ギャラドスはその場から大きくジャンプをして、回りながらハイドロポンプを撃ち始めた。
「これで少しは涼しくなる……筈だ」
今はただそれだけを願うラムパルド
「濡れタオル出来ました！」
いつの間にかラムパルドの横で濡れタオルを作っていたガブリアス。早速そのタオルをポケモンへと乗せる
「だいじょーぶかなぁ……」

ボーマンダは心配しながら眠っているポケモンに翼を羽ばたかせ風を送っていた

「……残るは水分を補給させる事だけなんだが、飲める水が……」

悩むラムパルド。

幾ら気温を、体温を冷やそうと水分を補給させなければ意味がない。

「うーん……さっきのオアシスはどうッスか？」

「それだ！　……つっても遠すぎるな……」

あのヘラクロスが絞り知恵も無駄に終わる……かと思われた。

「私が行きます」

ガブリアスがそれだけを言い残し、先程のオアシスへと全力で向かっていった

「かなり距離あるぞ……」

「只今帰りました！」

「速いな……」

ラムパルドとヘラクロスもびっくりするほどの速度で戻ってきたガブリアス。

その両手には大量の水を含んだバケツを持っていた

「流石はマッハポケモン……早すぎるッス……」

ヘラクロスは開いた口が塞がらなかった。
仲間とはいえど此処まで速いガブリアスを見たことが無かったからだ。

水分の補給も終わり、後はただひたすら目覚めるのを願い待つだけのボーマンダ達。

「速く目覚めるとイイッスね……」

「そうだね……。それに僕ももうヘトヘトだよ……」

終始ハイドロポンプを乱射して辺りを冷やしていたギャラドス。彼が一番頑張った筈だ。

「水はもう無いけどアイスならあるよ〜」

「なんであるんですか……」

「てかさっき喰ってただろうが……」

ただただ呆れるガブリアスとラムパルド。流石にアイス切れの筈……と思っていたらしく、先程のコメントに呆れ返る事しか出来なくなっていた。

ギャアギャア騒ぎ始めた最中、ボーマンダ達が介抱したポケモンが……目を覚ました。

「……あれぇ……？　ここ……どこ……？」

そのポケモンは何かを探すかのように辺りをキョロキョロと見渡す。
するとボーマンダ達が視界に映る。

それに気付いたラムパルドがそのポケモンへと近付く。

「起きたか……。よかったなお前。行き倒れだったんだぞ？」

「ふぇ？」

事情を説明するラムパルド。
謎のポケモンはまだ子供だったらしく、理解には少しばかり時間が掛かってしまった。

「……という事だ。分かったか？」

ラムパルドの問いに頷く謎のポケモン。

「んじゃあ改めて自己紹介でもしとくか。某はラムパルド」

「僕はギャラドス。」

「オイラはヘラクロスッス！」

「私はガブリアスです……ってそんな事は分かりますよね。」

いらぬ補足を入れる奴も居れば暑苦しい奴もいる。
色々とツッコミ要素が多いのだが、まだ子供の謎のポケモンはただ聞くだけにした。

「ボクはボーマンダ♪助かってよかったよ〜♪」

自己紹介をしつつアイスを手渡すボーマンダ。有無を言わさず持たされた謎のポケモンは少し困った表情をしながらアイスを見つめる。

すると、

「……もしかして……ボーちゃん？」

そのポケモンはアイスとボーちゃん――ボーマンダをじーっとなんども見つめ直す

「うーん……どこかで君と会った記憶があるにはあるんだけどなぁ〜……」

珍しく悩むボーマンダ。
てか最初から思い出せよ、と思う全員であった

「忘れちゃった？　僕はゾロアだよ？」

そのポケモン――ゾロアという名前にその場は一瞬にして氷付いた――

第十九話　救出！　そして……（後書き）

はい映画の影響で出したくなったから出してみましたｗｗ
映画のキャラとは大部キャラが違いますがねｗ

ゾロア
「は……初めまして……」↑さっ、と隠れる

因みに執筆スピード……速くなる所か寧ろ激減します（泣）
夏休み返上で資格試験の補習漬け……（泣）
まさかの丸一日使う事が多いという宣告に絶望しながら夏休みを待つ俺……

第二十話　ゾロアとボーマンダ（前書き）

まあ単純に過去話といふ（汗）
進展は特にな、い……？

ガブリアス
「何故疑問系なんですか（汗）」

ツッコミしないで（汗）

ラムパルド
「で、本当の理由はなんだ……？」

は？（汗）

ラムパルド
「なんで（ピーーーーーーーーーーーーーー）だって事だ」

今はそれ関係ないだろぉぉぉぉ！！（汗）

ヘラクロス
「……全く意味不ッス（汗）」

第二十話　ゾロアとボーマンダ

ボーちゃんと何やら訳ありのポケモン――ゾロアと出会った一行

まずはこれ迄の経緯――ゾロア発見から救出まで――を簡潔に、かつ大雑把に説明するラムパルド。

「ほぇ……」

分かってるんだか分かってないんだかよく分からない表情をするゾロア。
まだ子供だから仕方ないかもしれない。
それには苦笑いしか出来ない一同……なのだが

「一大事だったんだよ〜？」

「「……」」

ボーちゃんのぶっちゃけた説明に硬直する一同……だが

「えええええっ？！　そうだったの？！」

あっさり理解するゾロア

何故そんなぶっちゃけた説明で理解出来るのか謎すぎてボーちゃんとゾロア以外ずっこけてしまう。

……十分大雑把に話したんだけどなぁ
そう思わずにはいられなかった

「……じゃあ僕はまた助けられちゃったんだね」
ちょっと悲しそうな表情をするゾロア

……また？

一つだけ皆の頭に引っ掛かった言葉があった。
『また』とはどういう事なのか。

「あ、あの……『また』とは……？」

やっぱり気になったので聞いてみる事に。

「……そっか。知る筈も無いもんね。」

ゾロアはちょっと考え込み、話す事に決めた

「ちょっと大雑把に話すけど……

――僕はマァと二人暮らしだったんだ。
誰にも見付からないような、誰も寄り付かないような場所に、ひっそりと暮らしてたんだ。
僕らの種族は幻影を魅せる能力を持ってるから……昔から忌み嫌われてたんだ。
それでも平和に暮らしてたからいいんだけど。
僕もマァもその暮らしを気に入ってたんだ。
でも……

僕らの力を利用しようと、僕らを狙って来た奴等が現れたんだ。
僕もマァも応戦したけど……全く歯がたたなかった。
そして……抵抗した事に腹を立てて……殺そうとしてきた。
もうお前達は必要ないって……

そんな時にボーちゃんが何処からともなく現れたんだ。
口にアイスを携えて、圧倒的な強さでそいつ等を蹴散らしてったんだ。
戦い終えると僕らの事に付いて色々と聞いてきたり……沢山アイス

をくれたりしたよ。あの時のボーちゃんの笑顔は忘れられないよ。

それから暫くしてボーちゃんは去っていったんだ。
僕らも少しして後を追うように、新しい住む場所を求めて旅をする事にしたんだ。戦いでもう住めなくなったからね

でもきっと世間からは冷たい目で見られる。
そう思ってた。

所がね……そんな人達はもういなかった。寧ろ親しくしてくれたんだ。

どうして？　って聞いたら……

色違いのボーマンダから貴方達はホントはいい人達なんだ。って教えられた。

って言ったんだよ。

色違いのボーマンダなんてボーちゃんしかいないからすぐに分かったよ。

ボーちゃんのおかげで僕らは今沢山の人達と平和に暮らしてる。
感謝してもしきれない程にね――

「というのがボーちゃんとの出会いで……『また』の意味が今の話なんだ」

ふぅ。と深く一息付き、話疲れたらしく少し休むゾロア

「そんな事が……」

「流石というかなんというか……」

口をあんぐりさせるガブリアスとラムパルド。

当事者のボーマンダは……美味しそうにアイスを食べていた

「一つ気になるッスが……」

今までちんぷんかんぷん状態だったヘラクロスが口を開く。

「『マァ』って……誰ッスか？」

さっきの過去話で『マァ』というのが誰の事なのか全く分からないらしく、必死に頭を捻っていたヘラクロス。だが全く分からなくて聞いてみたのだ。

「マァって言うのはゾロアの進化した姿、ゾロアークの事だよ～♪」

ゾロアの変わりに答えるボーマンダ。

「成る程、母親か……」

ラムパルドの呟きにより『マァ』の意味をやっと理解した一同。

そっち?！　と心の中でツッコミを入れるゾロアであった。

「それでさぁ、そのマァはどうしたの～？」

ボーマンダの質問に表情が少し暗くなるゾロア。

「……実は……また僕らを狙う奴等が現れて……マァとは離ればなれになっちゃったんだ……」

第二十話　ゾロアとボーマンダ（後書き）

ガブリアス
「流石ボーちゃん♪」←きらきら

ボーちゃんですからw

ボーちゃん
「アイスアイス～♪」←

ギャラドス
「最後の台詞……なにあれ？（汗）」

まあ楽しみに待ってなさいw

第二十一話　散策（前書き）

久々の更新の癖にサブタイトルは微妙（汗）

ボーちゃん
「あはは～♪」

しかも最後は滅茶苦茶ふざけたっていうね↑おい

がぶりん
「……私達の存在忘れられてないかな……？」

さぁねぇ。
滅茶苦茶放置したからわからんｗｗ

ギャラドス
「……僕が一番空気な気がする」↑

気のせいだｗｗ

第二十一話　散策

「居ないなぁ……」

「どこにいるんだろうね～？」

ゾロアの進化系にして、母親のゾロアーク、マァを捜索中のボーマンダ達。

今は砂漠を抜けて、ゾロアがゾロアークと最後に別れたら場所に来たのだが……

そこには誰もおらず、地面が凹んでいたり、木々が薙ぎ倒されていたりと、戦闘があった事だけが目立っていた。

「マァ……」

悲しそうな表情になるゾロア。
それを見たボーマンダは、ゾロアの頭にポン、と手を置き、ゾロアの頭を優しく笑顔で撫でた。

「だいじょーぶ♪絶対ボク達が見付けるから♪」

そう優しく語りかけるボーマンダ。
根拠はない。だがその満ち溢れた自信は『諦める』という事を微塵も感じさせなかった。

ゾロアはゆっくりと頷き、再びゾロアークの捜索を開始する。

そんなボーマンダ達の様子を影からこっそりと監視するように見つめるポケモンの姿があった。

「……」

そのポケモンは、ボーマンダ達が次の場所に向かうと、静かにその場から立ち去った。

いったい何が目的なのだろうか。

場所はうって変わり、暗い洞窟の中のような場所。

「……ボス～」

先程までボーマンダ達を監視していたポケモンの姿があった。このポケモン、かなりのんびり屋らしく、声がその場の雰囲気に合っていない。

それは置いといて他にもポケモンがいるみたいなのだが、暗い為に姿が確認出来ない。

「……なんや？　どないした？」

ボス、と呼ばれた関西弁の男は静かに声をあげる

「……アイツの子供が見付かったんだな～」

やはりこの場の雰囲気とミスマッチしすぎている。

ボスはその情報を耳にすると、その場から勢いよく立ち上がる。

「……いよいよや。彼奴等親子の力をようやく手に入れる事が出来るんや……。ほんでそのガキは何処や？」

興奮を隠しきれずに何処にいるのか尋ねる。

まるでおもちゃを欲しがる子供のように

「徐々にココに向かって来てるんだな～」
「ほぉ～……そりゃ好都合やな」
「でも厄介な事が一つあるんだな～」
「なんや？」

ボスは顔をしかめる。
すんなり手に入るものだと思っていたらしい。

「……『天空の管理者』がアイツの子供と一緒にいるんだな～」

『天空の管理者』の単語を耳にした刹那、関西弁のボスが顔だけでなく、身体全身が青ざめていく

「んな……アホな……。またアイツかいな！　事ある事に自分らの邪魔ばかりしよってからに！」

ドスン、と鈍い音が響き渡る。
壁を思いきり殴ったらしい。
それ程苛立ちを感じているようだ。

「どうするんだな～？『天空の管理者』がいる時点でオラ達の負けは見えてるんだな～」

頭をポリポリとかきながらすっかり諦めムードの男。
いつの間にか手にポテチの袋をもっており、ポテチを一枚一枚パリパリと食べている。

「……まあちょうどエエわ。数年前の怨み晴らさせて貰おうやないか。」

復讐に燃える関西弁のボス。

「オラ戦いたくないんだな～。めんどくさいんだな～」

そんな事をぼやくのんびり屋の男だった。

「今度ばかりは邪魔させへんで……！　自分らの計画をな……！」

そう決意するボス。
ボスの後ろには、かなり大掛かりな装置があり、その装置の中央に存在するカプセルのようなものの中に、赤く長い髪、スリムな黒い身体……ゾロアークがいれられていた。
ゾロアークの入ったカプセルには緑色の液体がいれられており、その液体の中でゾロアークの身体は上下していた。

「はよう来い……『天空の管理者』……！」

場所はうって変わり洞窟の外。

「う～ん……いないなぁ……」

未だ散策中の一行。
いくら探してもやはり見付からないゾロアーク。

「マァ……何処にいるの……？」

空を見上げるゾロア。
日も少し落ち初めている。

そんな時

「……如何にも怪しい場所を発見しました」

一人かなり前を進んでいたガブリアスが戻ってきてこの先に洞窟がある事を皆に伝える。

「マァ……そこにいる気がする……。」

ゾロアがボソリと呟く。

「私もそう思います……」

「ボクも～♪」

「オイラもッス！」

「僕も……」

「んじゃ決まりだな。」

皆向かう気満々のようだ。

「だってどう考えても怪しいんだもん♪」

こんな文に突っ込まないの。

「皆……」

一行の勢いに少し呆気に取られるゾロア

「それじゃあ……皆行くよ～♪」

「「おお～！！」」

一行は洞窟へと突撃を始める。
近くにいたポケモン達はなにかを察知したのか、次々と道を開けて
走り去るボーマンダ一行を見送る。

中には着いていくものも数人いたが。

先の洞窟では何が待ち構えているのか。
ゾロアとゾロアークは再開出来るのか。

結末やいかに。

「もう終わり方がワンパターンだね」

……今それいうか……

第二十一話　散策（後書き）

ええふざけすぎましたよ。
でも反省はしていない↑しろよ

ボーちゃん
「次はどうなるの～？」

そりゃあバトル……かも

ラムパルド
「かもかいっ！（汗）」↑激しいツッコミ
あっはっはっはっはww↑やけくそ

ヘラクロス
「笑ってる場合ッスか……（汗）」

第二十二話　洞窟の先には……（前書き）

半分以上ネタ、ギャグでww

そして……遂にイッシュのポケモン達も登場します

ボーちゃん

「名前だけのもあるけどね～♪」

まぁ、どうぞww

第二十二話　洞窟の先には……

「……暗っ！！」

明らかに何かがありそうな雰囲気漂う洞窟に突入したボーちゃん一行。
だがその道中はとてつもなく暗く、外はまだ昼間だというのに日の光が全く反射せず、黒の世界のみが広がっていた。

「オバケでるかなぁ～♪」
「お、オバケぇ？！」

ボーマンダの気ままな発言にビビるガブリアス。
お約束通りオバケが苦手なご様子。

「……なんか薄紫に光る物体が見えるよ……？」
「いやああぁぁぁぁぁ？！」

ギャラドスの一言に遂には発狂しはじめるガブリアス。
猛然と何かを忘れようと洞窟内をダッシュ、ダッシュ、ダッシュ。
壁にぶつかろうが直進していく。

「……ホンのジョークなのに」
「てかケンタロスか、アイツは」
「バッフロンじゃないッスか？」

ケンタロスとバッフロン、どちらも突進の破壊力は凄まじい事で有

名なポケモン。
確かに今のガブリアスはどちらにも見てとれる。
「ホントに大丈夫かなぁ……」
緊張感は無いのか。
と、ついつい分かっていてもそう思ってしまったゾロア。
段々不安になってきたらしい。

その頃、未だに猛ダッシュを続けるガブリアス。
そこら辺にいたイシツブテやダンゴロを吹っ飛ばしながら止まる事なく走り続ける。が、
「ぐぶっ！」
なにやらとてつもなく堅い物にぶつかったらしく、ようやく止まった。
「な、なんですかこれは……？」
打ち付けた部分を押さえながらそれを見上げる。
だがやはり暗くてよく分からない。
「……ライト……無い……ですよね」
近くに光る物があるか探すが、探すだけ無駄だった。
……と、思いきや。
「……」

近くにろうそくとランプと……シャンデリアが無造作に置かれていた。

「……罠ですかね？　これは……」

罠と分かっていてもついつい手が伸びる。
そしてランプを手に取ろうとした、その時。

「……プラ～」

ランプが……動き出したのだ。
しかも……喋った。

「……いやぁぁぁぁぁぁ！！？」

ランプを力任せに投げ棄て、来た道を逆戻りしていく。

「ナンダナンダ～？」
「ナゲステラレタ～」
「ハシルネ～」

ろうそくとシャンデリアも動き、喋りだす。
各々に顔が浮かび上がる。

この三匹は皆ポケモンなのだ。

「アハハ～」
「アハハハ～」
「アハハハハ～」

上からヒトシモ、ランプラー、シャンデラ。
皆ゴーストタイプである。
ボーちゃんの予言はある意味的中していた事が判明した。
「「「アハハハハハ〜〜」」」

「いやぁぁぁ！！」
「ん？」
それから直ぐにボーちゃん達の元へと戻ってきた。
「おばっ、オバケがあぁぁぁ！！」
終始泣きっぱなしのガブリアス、水分は大丈夫なのだろうか。
「ど、どうしたんスか？」
「オバケがぁ……」
泪目で全員に訴えかける。
「……この先で何があったのかな……？」
「大体の……予想はつくぞ……もぐ……」
早すぎる展開についていけずにいるギャラドス。

ラムパルドは全て理解しているようだ。
……そのラムパルドだけ何か食べているが。

「……なに食べてるのさ」
「ん？　鉄鉱石」

鉄鉱石の成分が頭蓋骨に行ってるからあんなに堅い頭になる……事は今はどうでもいい。
問題は何故そんなものを食べているかだ。

「頭蓋骨の強化になると思ってな」
「……」

そんなんでなるものなのか？　と思わずにはいられないギャラドス。
どうせなら金剛石でも食べてろという話。
まあホントの問題はそれではなく

「……バリバリバリ食べる音が響いて頭が痛い……」

そう、鉄鉱石を噛み砕く音が五月蝿いのだ。
それにガブリアスも未だに泣いているから二重に五月蝿い。

――せめてさっさと泣き止んでくれないかなぁ……

と刹那に願うギャラドスだった。

それから更に暫くして、

「それで、何があったの？」

「実は……」

なにがあったかを話すガブリアス。

実はぶつかったあの時に……何かを見付けていたのだ。

「ほぉ……機械的な、何かか……」

「はい……」

「……おおかた、なんかの装置だろうな。」

なぜこんな洞窟に機械的な装置があるのだろうか。謎すぎる。

「……んじゃあちょいと行ってみるか。その装置かもしれない物の所によ」

一行は怪しい匂いがプンプンするその装置へと向かった。

「……意外にでけぇのな……」

ついてみると意外に大きかったらしく少し驚愕するラムパルド。

因みに明かりはというと……ラムパルドの頭が光っている。どうやっているのだろうか。ラムパルドの頭の成分は何で出来ているのだろうか。そんな事はさておき……

「……あっ、マァだ！」

装置かもしれない物の周りをぐるぐる回っていると、装置かもしれない物の中に、謎の緑色の液体と共にゾロアの進化系であるゾロアークが入れられていた。

「でもなんでこんな所に……」

「それはオイラがやったんだな～」

いきなり装置かもしれない物の後ろから声が聞こえた。

「……誰だ？」

「オイラはオイラなんだな～」

なんとも呑気な声と共に現れたのは……ヌオーだった。

「君はだぁれ？」

「オイラは……」

少し、間を空けてこう言い放つ

「新たに蘇り復活した、新生『エターナル・ルイン』の一員なんだな～」

第二十二話　洞窟の先には……（後書き）

あえてのヌオーですよ、ええｗｗ

ボーちゃん

「……」↑不機嫌

……まあボーちゃんの一番聞きたくない単語が出たからねぇ（汗）

さあ、これからどうなるのか！

次回をお楽しみにｗｗ

第二十三話　謎多き組織（前書き）

……サブタイトルにいいのが無かった（汗）

ボーちゃん
「しっかり～」

今回は……またもや謎が増えますw

ヘラクロス
「え（汗）」

ここで多くは語りませんよww
ではどうぞww

第二十三話　謎多き組織

行方不明のゾロアークを捜索していたボーちゃん一行。
謎の機械に捕らえられたゾロアークを遂に発見した……のだが、新生『エターナル・ルイン』の一員と名乗る謎のヌオーがボーちゃん達の前に立ち塞がった。

『エターナル・ルイン』
その一言はボーマンダの表情を一瞬にして一変させた。
その表情からは笑顔が消え去り、怒り、憎しみ……そして復讐という様々な感情が入り交じった鋭い銀の眼差しでヌオーを睨み付けていた。
何時もとは全く様子の違うボーマンダにただただ戸惑う仲間達。
「……その名はもう『死んだ』筈だよ……？」
死んだ……多分滅んだという意味なのだろうと皆は推測する。
「確かに～、一度死んだんだな～。でもそれから……蘇ったんだな～」
「「！！」」
そう喋り終えると同時に吹雪を放つヌオー。
だがボーマンダは……一切動かない。

「な……？！」

何故か動こうともしないボーマンダをみて驚きの表情を隠せない。
敵であるヌオーを少し目を大きくして、ボーマンダを見ている。

「……ならもう一度、ボクが悪事を働けないように叩き潰すまでだ！」

そう力強く、何かを決意するように叫び、懐から何かを取り出す。
そして――その取り出した何かに吹雪は吸い込まれていった。

「「うっそぉ？！」」

何故だ。原理が分からない。理解に時間がかかる……かと思われたが、その手に持っているものを見るや否や皆は納得した。

「な、なんなんだなそれは？」

まさか吸収されるとは思っていなかったらしく、驚きの表情でボーマンダを少し睨むヌオー。

「これは永久氷……。如何なる氷タイプ技を吸収する……」
「え……？」

しかし、皆の頭に初耳の言葉が流れた。

――そんな事は一言も言ってなかったよな？
皆は顔を見合わせる。

氷タイプの技を吸収するとは誰も聞いていない。

だが隠していたとも思えない……

「そんな……ひ、卑怯なんだな！」

「卑怯……ねぇ。だったらボクはそのまま卑怯者でもいいよ……」

刹那、ボーマンダの姿が消える――否、ヌオーの後ろに回り込む。

「大切な友達を助ける為ならね！」

そしてドラゴンクローがヌオーを力強く切り裂く。

ヌオーは何も言わぬまま切り裂かれ吹き飛ばされる。

そしてそのままヌオーは洞窟の壁に激突する。

――やった。皆がそう思った矢先、ヌオーが……消滅した。

「……じょ、成仏したッスか？」

「幽霊じゃないでしょどう考えても……。」

急な事に思わずボケるヘラクロスに突っ込むギャラドス。

「……身代り（デコイ）、だね。」

ボーマンダの一言に納得する一同。

身代りならば消滅したのも納得がいく。
「元から……ボクとは戦う気なんてこれっぽっちも無かったんだろうね。」
「本人は某等が身代りと戦ってる間にとっとと逃げたって訳か……。気に食わねぇ……」
「ま、まあ悔やんでも仕方無いですよ」
ガブリアスが宥めるも、ラムパルドは我慢ならないようだ。
ボーマンダはどうか分からないが……。
その表情に一切の変化がないので、何を考えているか分からないのだ。
「とりあえず……この機械速く壊そ――」
「その必要はあらへんで～」
ゾロアの発言を遮るように、装置の方から聞きなれない声が聞こえてきた。
「……誰だ、テメェ」
「おお～怖い怖い。そない睨まんといてや。」
「……今すぐ叩き潰してやろうか？」
棒読みでラムパルドをさらりと流す謎の男。
ラムパルドの怒りのボルテージがどんどん上がっているのが目に見えてわかる。
その証拠に身体中の全ての血管が浮き出そうになっているのだ。
「おっと、自己紹介がまだやったな。わてはエターナル・ルインの新幹部の……アーケオスや。」

アーケオス。最近新たに見付かったポケモンで、新たに見付かった化石から再生したアーケンというポケモンが進化した姿。

「……その新幹部様がなんの用？」

「なんてことはない、ただの交渉や」

「……信じられないね」

交渉、などと言っているが、どうもボーマンダは信じられないらしく、ドラゴンクローの青白い爪先をアーケオスの喉元に当てている。

「そない物騒な事せんでもエエやん。わて嘘嫌いやしな……」

何故か寂しそうな表情をするアーケオス。

ボーマンダは無言で腕をアーケオスから離し、ドラゴンクローを解く。

「わかってもろてなによりや。で……交渉の内容や。この装置の中のゾロアーク……あんたらに返すわ」

これには全員驚いた。交渉を持ち掛けてきたと思ったら、ゾロアークを解放すると言ってきたのだから。皆に喜びの表情が少し浮かび上がっていた。

「ただし、や。……この装置とわてら……見逃してくれへんか？」

――やはりそうきたか――

皆ある程度予測していたらしく、とくに驚きもしなかった。

「……わかったよ。」

少し間があったものの、ボーマンダはゾロアークを優先して、返事をした。

「交渉成立やな。」

そういうと、装置が開き、水が抜かれ、ゾロアークが解放された。

「マァ！」

ゾロアは猛然とゾロアークの元へと向かう。

「うっ……、ここは……？」

「マァ～！」

ゾロアークは無事らしく、怪我一つ見当たらない。

「ぼうや！　無事だったのね！」

「うん！　ボーちゃん達が助けてくれたんだよ！」

そういってボーマンダ達を指差す。

「一度ならず二度までも……ホントにありがとうございます！」

「いいよ♪ゾロアークが無事でよかった♪」

ボーマンダも、いつもの可愛らしい笑顔を見せて返事をした。

「……そういえば、さっきの方はどこに……？」

ガブリアスが思い出したように辺りを見回すが、アーケオスがいな

い。
それどころか、あの大きな装置すらなくなっていた。
「……逃げたッスね。アイツ」
「無理があるって……こんな短時間であんな大きな物もって逃げるなんて。」
「まあまあ、いいじゃねぇかよ。アイツが無事だったんだからよ」
あまりにも不可解すぎるが、ゾロアークが無事だった為気にしない事にした。
そのゾロアークはボーマンダと一緒にアイスを食べていた。
…いつの間に。と思ったギャラドスとヘラクロスだった。

時間は流れ、空が赤く染まる頃。
「もうこんな時間だね～」
「つい話し込んじゃったわね。昔の話を語ると時間が過ぎるって噂は本当だったわね」
「いえてる～♪」
昔の話をしていたらしく、うっかり話し込んでいたらしい。
皆揃って話をきいていたみたいだ。
「そういえばこれからどうするの？」
「そうねぇ……」

あごに手を当て考え込むゾロアーク。
暫く唸るように考えた後、
「……新しい家が見付かるまで暫く、同行してもいいかしら……？」
なんとそれは予測外の答えだった。
もちろんの如く返事は――
「いいよ～♪」
この一言だった。
「いいよね皆？」
「もちろんッス！」
「よろしくお願いします……」
「よ、よろしくね……」
「……賑やかになりそうだな」
皆もオーケーみたいだ。
「皆オッケーだって♪」
「ボーちゃんと一緒だ♪」
「暫くの間だけど、よろしくねボーちゃん！」
ゾロアークとボーマンダは、互いに手を出し、強く手を握り握手した。
こうして、暫くの間ゾロアとゾロアークの親子が同行する事になっ

た一行。
更に楽しくなりそうだ。

「……そういえば、ボーちゃん達ってボケとツッコミの比率がおかしいわよね。毎回ツッコミとボケが変わってるし。」
「そぉ？」
「気付いてなかったんだ……」

……今更ながら、大丈夫なのか？　この一行。

「……まだ、いたんやな自分」
「……いちゃ悪いか……？」

一行とは少し離れた場所で、先程のアーケオスと誰かが話をしている。

「……しかし久しぶりだな、テメェを見たのは」
「わてもや。そっちは上手い事やっとるんやろな？」

「あ゛？　某を誰だと思っている。そっちこそ上手くやってんだろうな？」
「さっきの台詞、そっくりそのまま返すわ」
「ケッ、嫌味な野郎だな相変わらず」
「自分もその乱暴口調は変わっとらへんなぁ……。」
「……まあいい。とにかくだ、うまくやれよ……、バレたらお前、即刻殺されるからな……」
「大丈夫や。わて幹部やさかい、少々の事はやってもばれへんばれへん」

この二人……何かを隠しているらしい。

「ま、いずれ自分にもいい方向に風が傾くわ。期待しとってや、ラムパルドはん。」

第二十三話　謎多き組織（後書き）

ヘラクロス
「ちょ……（汗）最後のなんスか（汗）」

そら伏線だものｗｗ

ガブリアス
「……（汗）」

うひひｗｗ↑↑

第二十四話　聖夜にて……？（前書き）

三十分前に思いついたこのネタがもう書き上がるとはｗｗ
まあ短いですけどｗｗ

一応、ホンのちょっとだけ話が繋がってますｗｗ
最後だけだけどねｗｗ

ではどうぞ！

第二十四話　聖夜にて……？

今日はクリスマス……皆が飾り付けをしてケーキとか食べてサンタさんがプレゼントを持って来るのを待つ子供達が待ち望んでいた日。

そんな日がポケモン達の世界にもやってきました。

では早速覗いてみましょう……

「クリスマス～がやってきた～♪」

ポケモンの世界のとある場所、雪がしんしんと降り積もるなか、一匹のポケモンが歌いながら飾り付けをしています。

「うん♪飾り付けしゅーりょう♪」

飾り付けを終えてうん、とのびをする……ボーマンダ。

ええボーマンダですよ。だってボーマンダが主人公ですから。出ない筈がありません。

「サンタさん来ないかなぁ～♪」

そんな事を呟きながら、空を見上げるボーマンダ。綺麗な星空です。

「ケーキ出来ましたよ～」

ふと後ろからそんな声が聞こえました。ボーマンダが振り向くとそこには、ガブリアスがケーキを持ってやって来ました。

「わぁ～♪美味しそう～♪」

「そりゃあ腕によりをかけて作りましたから♪」

「作ったのお前じゃなくて拙者だがな……」

ガブリアスのコメントにすかさず突っ込むラムパルド。いったいどこから現れたのやら……。

「ま、それはいいとしてだな……。ボーちゃん、これ着ろ」

「ふぇ？　わかった～」

ボーマンダに何かを渡すラムパルド。

なにやら解らぬまま渡されたものを着るボーマンダ。

「着たよ～。」

「……やっぱり似合ってるな」

ラムパルドがボーマンダに渡したもの、それは――

「サンタだよ～♪」

サンタの衣装だった。どうやって作ったのかは謎だが。
因みにガブリアスはボーマンダのサンタ姿を見て鼻血を吹いて倒れている。

「おっ、中々似合ってるじゃないボーちゃん。」
「ホントだね。」

ガブリアスを無視して現れたのはゾロアとゾロアークの親子。
こちらもサンタの格好をしている。

「そっちも似合ってるよ〜♪」
「てかもう誰が着ても似合うだろ……」

一人呟くラムパルド。
その呟きは誰も聞こえる事はなかった。

「……ねぇ」
「何スか？」

そんな五人の傍ら、少し離れた所でボーマンダ達を見ているギャラドスとヘラクロス。

「……やっぱり無理があるよね。」
「そうッスね〜……」

何故かギャラドスとヘラクロスの居る場所には雪が降っていない上に、明るい。
というよりボーマンダ達の居る場所だけ暗くて雪が降っているのだ。

「幻影で無理矢理クリスマスの雰囲気出そうなんて……」

「やっぱり無茶ッスね。それに全然寒くないッスから。寧ろ熱いッス」
「見渡す限り、砂だしね……」

そう、彼等は……また砂漠の中に居たのだ。

第二十四話　聖夜にて……？（後書き）

ふっふっふw
まさかのそういうオチですww
予測出来た人はいないでしょうなww

ボーちゃん
「ちゃんとクリスマスパーティーやりた～い」

……ま、我慢してくりぃ（汗）

第二十五話　幼なじみ（前書き）

新年最初の更新にございまする

ボーちゃん
「今更だけどあけおめ～♪」

ホント今更ですいません（汗）

新年最初からぶっ飛ばしていきますよ～♪

ボーちゃん
「どうぞ♪」

第二十五話　幼なじみ

とある時間帯のとある上空にて、

「……情報によるともうすぐの筈、なんだけど……」

「見付かりませんね……」

空を飛んでいる、謎の二人。

誰かを探しているようだ。

「まさかとは思ったけどさ……」

「私もびっくりしましたよ。彼が生きてるなんて。」

「僕等が引っ越した後だったからね……。僕等は無事だったけど……。」

「『あの』事件から……、いや、あの時引っ越してから、何年経ちましたっけ……」

「軽く十年以上は経ってると思うけど……」

「……きっと私達の事、忘れてますね。彼は。」

「だろうね……。」

彼、の話で盛り上がる謎の二人。

「今は……『天空の管理者』なんて、凄く偉くなっちゃったね。」

「私達も成長しましたけどね。」

「早く会いたいなぁ……」

「私もです……」

謎の二人は、紅と蒼の軌跡を残しながら、空を駆けて行った。

うってかわって再び砂漠の中へと舞い戻った一行。
ただ今度の砂漠は前回とはうってかわっており――

「さ、寒い……」

寒かった。
今の季節は冬、そして時間帯は夜なのだ。故に寒い。
月明かりに照らされるこの砂漠は、雪が降り積もった白銀の世界と殆ど変わらず、吹き荒れる砂嵐は吹雪を思わせる。

「寒いッス……」
「……私寒いの大嫌いなんですけど……タイプ的にも……」
「まあ……仕方無いよ、それは……。」

半分諦めている一行。何を諦めているのかは分からないが。

「でもアイツだけは全然違うけどな……」

ただ、一人を除いては……

「冬だ冬だ～♪雪降らないかなぁ～♪」

そう、我らが主人公、ボーマンダ。
彼は「寒い」という言葉を、一度も発していないという。
一人だけ物凄く元気だ。寧ろ元気すぎる。

「……なんで、あんなに元気なんでしょう……？」
「きっとあれだよ……。あの氷持ってるから……」
「あぁ……」

だがしかし、謎は意外と早く解けた。
ボーちゃんが持つあの氷の方がよっぽど冷たく、寒い事を皆は知っている。

「どうしたの皆？　元気無いよ？」

一人先を歩いていたボーちゃんだが、皆が遅いので後ろに振り返って、そう言う。

「相変わらずのこのマイペース……。それにしても元気だねぇ、ボーちゃんは……」
「その元気、僕にも分けて欲しいよ……。ねぇ、マァ？」
「……逆に貰ったら貰ったで、なにか恐ろしい事になりそうな気がするわね……。」

元気なボーちゃんを見て、そんな会話をするゾロアーク親子。因みにゾロアはゾロアークの髪の毛の中で暖まっている。

「ボーちゃんと同じ性格になりそうだな……」
「あ、有り得る……」
そんな事を思うと、背筋がゾッとするのだった。
ゾロアに至ってはカタカタ震えている。やはり怖いのだろう。
そういう事を想像はしたくないので、各々必死に気をまぎらわせていた。

そんな時だった。

全員を照らしていた月明かりが、突如として遮られた。
静まり返る砂の大地。驚愕するボーマンダ達。もっとも、ボーマンダ自身は何時も通り、笑顔のままで動じてはいないのだが。
月明かりを遮った物、それは……二頭の龍だった。
その二頭の龍は、ゆっくりとボーちゃん達の元へと降りてくる。
片方は真っ黒な身体をしており、もう片方は逆に真っ白な身体をしている。

その二頭の龍の存在は、今まで動じなかったボーちゃんを、驚愕の表情へと変える。

「やっと見付けたよ……」
「あの時から変わらない、翠色の身体をしてたから直ぐにわかりましたよ。」

ボーちゃん意外は勿論の事、何が何やらわかっていない。
そして当の本人はというと、

「……誰だっけ？」

一番わからなければいけない者が、一番なにもわかっていなかったという。

この発言に、ボーちゃん以外の者全員がずっこける。

「やっぱり忘れてたか……」

「思い出して下さいよ……」

予想してたので、そこまでショックは受けてないようだ。

「……あ～！　もしかしてレシラムとゼクロム？！」

ふと思い出したらしく、その二人の名を叫ぶボーちゃん。

レシラムとゼクロム。元は一つの存在であり、今は対なる存在。その二人を、ボーちゃんは知っていた。

「レシラムとゼクロムって……どっちも伝説じゃ……」

「こんな所でお目にかかれるとはねぇ……」

「でも……なんで知ってるんですか？」

ふと浮かび上がる疑問。その疑問への返答は、たった一言。

「だって、僕の幼なじみだもん♪」

その一言は、やはり各々の反応を一つに纏めた。

『えええええええええええっ？！』

第二十五話　幼なじみ（後書き）

と、いう訳でして、ボーちゃんの幼なじみのレシラムあーんどゼクロムですｗｗ

レシラム
「……私達こんな所に来ていいんですか？」

いいのいいのｗｗ↑

レシラム
「……あ、このお菓子美味しいです♪」↑↑↑

……（，・ω・、）

ゼクロム
「そんな顔しないの（汗）」

この幼なじみ二人は何者なのか↑幼なじみだろうが

それは次回！
明らかになる……かも

ゼクロム
「かもなんだ（汗）」

第二十六話　白≠黒（前書き）

ちょっと特急で書き上げたから何時もより一層ぐだぐたです（汗）

レシラム
「……確かにぐだぐたですね」

ゼクロム
「半分レシラムのせいだけどね（汗）」

……お楽しみ下さい……って無理か（汗）

第二十六話　白≠黒

『幼なじみ』

とても軽い、何気無い一言なのだが、今はその一言がとてつもない一言になっていた。

何故ならば、相手が相手なのだから。

「神と呼ばれる方と幼なじみって……」

「つくづく、ボーちゃんは何者なんだと思わされるな……」

「……同感ッス」

そのスケールの大きさに戸惑うばかり。

「ねぇ、彼等はいったい……？」

「ボクの仲間だよ♪」

「……弄り甲斐がありそうです」

『（ぞくぞくっ）？！』

仲間達を紹介していくボーちゃんの傍らで、一人不穏な発言をするレシラム。

悪寒が皆の背筋を走る。

「へぇ～……。個性豊かだね」

「ホントに個性豊かな面々ですねぇ……ふふふ……」

またもや怪しい笑みを浮かべるレシラム。ガブリアス達もかなり引

いて距離を取る。

「じゃあ改めて自己紹介すりね。僕はゼクロム♪世間では『理想の蒼雷』って呼ばれてるよ。」

「私はレシラム。世間からは『真実の紅炎』と呼ばれています。」

――ああ、やっぱり伝説の人達なんだなぁ……

改めてそう認識させられる。

『理想の蒼雷』と『真実の紅炎』

この名にはどんな意味が込められているのか……。それはまた追々。

「それで……何しに来たの？」

「……ただ、ボーちゃんに会いに来ただけです」

それはある意味素晴らしい理由だった。

「え……それって……」

「違うから。レシラムもそんな勘違いされるような言い方するの止めようよ……」

「勘違い？　私はホントにボーちゃんに会いたかっただけですけど」

「やっぱりそうじゃないですかぁ！」

「……冗談です」

なにやらガブリアスはレシラムの標的にされていた。

このレシラム、かなりのSのようだ。

「はぁ……」

「……なんて奴だい」

レシラムがこんな性格の為、ゼクロムの苦労は絶えないらしい。

「もぉ……冗談にも程がありますよ……。ボーちゃんは私のものなのに……」

『……』

今のガブリアスの発言が周りの空気を一瞬にして凍らせる。

――それはそれである意味勘違いされるぞ。

そう心の中で思った男性陣だった。

「安心して下さい。私は既に既婚済みですから」

「……へ？」

『……まじですか』

まさかの発言だった。

唐突すぎるまさか発言に、どう反応すればいいか分からない一同。

ボーちゃんも目を見開いている。

「今このタイミングでそれ言うかな……。」

「ボーちゃんが驚いた、それさえ達成出来ればいいんです。」

どうやら本当の話らしい。

会話から察するに、レシラムの相手はゼクロムのようだ。

そしてレシラムが腹黒いという。

身体は白いのに考えてる事が黒い。

あのボーちゃんを驚かせようというのだ。
それは無茶だろう……と思いきや、

「ほへぇ……、二人結婚してたんだぁ……」

物凄いびっくりしたらしく、言葉数が少ない。

「……私の勝ちですね」
「何に勝ったのさ……」

何故か勝ち誇るレシラム。それに突っ込むゼクロム。
中々いい夫婦のようだ。

「それで本題なのですが……」

――今かよっ！！

満場一致の心の叫び。
ある意味心が一つになった瞬間だった。

「実は……、ボーちゃんの一番嫌いな奴等が現れて、僕等の手に追えないんだ。」
「だから……ボーちゃん、貴方の力を借りに来ました。」

ボーちゃんの嫌いな相手……
それは一つしか無かった。

「エターナル・ルインの奴等か……」

「またッスか……」

めんどくさそうなヘラクロス。
ヘラクロスだけではなく、ラムパルドも少し嫌そうにしている。

「ん～……、君達に頼まれちゃったら、行かない訳にはいかないなぁ」

『……行くの？』

「行く♪」

「決まりですね。」

「……いいのかなぁ。こんなんで。」

物凄いぐだぐたな展開のまま、エターナル・ルインと戦う事になってしまったボーちゃん達。
こんなので大丈夫なのだろうか。
そして、レシラム、ゼクロムをも手を焼く者とは……。
どんな展開が待っているのやら……

第二十六話　白≠黒（後書き）

うーん……文章力が欲しい（汗）

レシラム
「望むだけ無駄、ですね」

ゼクロム
「そんな事言っちゃだめだって（汗）」

……（凹）↑

ゼクロム
「ほら凹んじゃった……（汗）」

第二十七話　謎の人（？）物（前書き）

あー……何ヶ月ぶりかな、更新は。

ボーちゃん「さね～♪」↑

……欲望に駆られて、やっちまった……。まだ出す予定じゃなかったのに……↑

ボーちゃん「何を～？」↑

それは中身を見なさい↑

第二十七話　謎の人（？）物

ボーちゃんの幼なじみのレシラムとゼクロムの頼みにより、エターナル・ルインが現れたという場所に向かっている一行。

だいぶ離れた場所らしいのだが、疑問が一つ。

「……お二方がそこから離れて、大丈夫なのですか？」

そう。その場所を守護する者が両方共、離れているのだ。当然、大丈夫な筈がないのだが、ゼクロムは、

「それなら大丈夫だよ」

と、全く表情を変えずに、続けてこう言った。

「そこに住んでる人達は皆避難したからね。」

「それなら大丈夫……なわけないですよ！　その場所がいない間に占拠とかされてたらどうするんですか！」

「力づくで奪い返せばいいだけですよ♪」

ガブリアスの最もな正論……をいとも簡単に、たった一言で終わらせるレシラム。

――無茶苦茶だな……。

そう思わざるをえない一言だった。

暫く歩いていくと、
「ほら、段々見えてきたよ。」
ゼクロムが指を指した先に、僅かだが建物が建ち並んでいるのがわかる。
「……あれッスか……？」
「やけに建物が少ないけどあれ……」
「……殆ど、戦闘で破壊されましたよ。」
あまりにも建物が少なかったが、理由は直ぐに答えてくれた。
「許せねぇな……。住居諸ともかよ……。」
「同感です。」
怒りを露にするラムパルドとガブリアス。
「で、その集団は何処にいるんだい？」
「……もうすぐ見えて来ますよ。」
「……？」
「何故なら……。」
レシラムの言葉の意味がわからなかったが、レシラムが火炎放射を急に放ったと同時に、飛び出した何者かが燃え上がり、動かなくなる。
「……こういう事です。後真っ黒ですけど、ちゃんと生きてますので。」

レシラムがにっこりと微笑む。皆はしっかりと、理解をしたみたいだ。因みに焼かれた者は、真っ黒すぎてなんのポケモンかわからなかった。

そして町に着くと――予想外の状態になっていた。

「な、なんスかこれ……？」

辺りには、あちこちから煙が立ち上ぼり、沢山のポケモンと思われる真っ黒な炭の塊が散乱していた。

「うわ～ぉ。」

「……なに、これ。どうなってるの……？」

「此処にはもう奴等しかいない筈……。」

そんな事を考えていると、ボーちゃん達の近くでとてつもなく大きな火柱が急に現れた。

「うぉっ？！　でけぇ……。」

「派手にやってるね～♪」

『いや面白がるなよ！！』

ボーちゃんだけただ一人、立ち上る火柱を見て面白がっていた。

とにかく、何が起こっているのか確かめるべく、火柱の上がった場所を目指して急ぐ。

「……な、なんて奴だ……。全く歯がたたねぇ……。」

そう呟くのはボスゴドラ。その表情は完全に恐怖に怯えている。

「ば、化け物か……？」

そんなボスゴドラの隣で呟くはドサイドン。二人の方が見た目的にも化け物な気がするが……。

「全く……なんでこのあたしが、こんな面倒事に巻き込まれなきゃいけないのよ……。」

突如として聞こえた謎の声。どうやらその声の主は女の子のようだ。

「あたしはただ寄り道しただけなのに……。」

そうぶつぶつ呟きながら、両手を構え力を溜める。

「や、止めてくれぇ！」

弁解するボスゴドラ。見た目に反して少し臆病なのか？

「……今更遅いわよ。」

弁解にも聞く耳持たず、その手に溜めたエネルギーをボスゴドラと

ドサイドンに投げ付ける。
ドサイドンは、ボスゴドラを守らんと言わんばかりに、その巨体自らを盾にする。

「……」

だが、直撃した筈なのに、何も起きない。

「……な、なんだ。何も起こらな――」

何も起こらないじゃないか。とでも言おうした瞬間、ドサイドンの目の前で爆発が起こる。その爆発に、声を上げる間もなく、ボスゴドラも巻き込まれてしまう。

「もう面倒事にあたしを巻き込まないでよね。」

その爆音は、近くにいたボーちゃん達にも、無論ながら聞こえてい

た。

「すぐあちらですね……。」

その爆発が起こった場所に目を向けると、爆炎の中から……一匹のバクフーンが現れる。

皆は自然と構える……ボーちゃんを除いて。

「……なによ、まだ残ってるって言うｎ――」

そのバクフーンは、ボーちゃんを見るやいなや、動きが止まる。ボーちゃんは無論、首を傾げる。……いつの間にか取り出した、アイスを食べながら。

「……あ、あなた、ボーちゃん、よね……？」

先に口を開いたのはバクフーン。ボーちゃんの事を知っているようだ。

「ふぇ？　ボクの事知ってるの？」

「当たり前じゃない！　……あの日の熱い夜の事、忘れたとは言わせないんだからね！」

その台詞を聞いた瞬間、皆が吹き出したのは言うまでもなかった。

第二十七話　謎の人（？）物（後書き）

ボーちゃん「ん～……、誰だっけ～……？」↑

未だにとぼけておりますボーちゃんｗｗ

ガブリアス「……い、一体どういう事なんですか……？」↑わなわな

ボーちゃん「ん～……あ、もしかして……」↑

何やら思い出したようですが今回はこの辺でｗ

では～ｗｗ↑

第二十八話　多すぎェ…（前書き）

久々に更新でけた（汗）

ボーちゃん「久しぶりっ♪」

サブタイトルは遊びましたw

ボーちゃん「今日は面白くないよ～♪」

言うなッ！（汗）

第二十八話　多すぎェ…

ボーちゃん達の前に現れた謎のバクフーン。
なんのこっちゃ、な事ばかり喋るバクフーンに対して、ボーちゃんは記憶をたどっている。その為先程からずっと「う～ん……」やら「ん～……」としか言わない。
それと序でに、バクフーンの「あの日の熱い夜」という台詞に過剰反応して、思考回路がショートしたらしく動かなくなったガブリアスが一人。そのガブリアスをつついているヘラクロス、変わりに戸惑うギャラドス、そしてその現場を面白そうに眺めるレシラムとラムパルド、ゾロアとゾロアークの親子がいた。

「えと……バクフーンさん？　話が全く見えないんだけど……。」

唯一の常識人（？）であるゼクロムがバクフーンに問う。だが、

「これはあたしとボーちゃんの問題なの。見ず知らずのアンタには関係ないでしょ。」

見事にあしらわれた。しかも鋭く、やたらと棘のある言葉で。ぐさぐさと心に結構突き刺さったらしく、少し落ち込み暗くなるゼクロム。そしてそれを見ても表情を変えないままのレシラム……。夫の落ち込む姿を見ても動じないのはどういう事だ。

「そ、そんなはっきり言わなくても…。」
「……落ち込むゼクロムは、やはり可愛いですね……フフフ……。」
『ッ？！』

最早何者だ、と言わんばかりのレシラムの台詞に、悪寒が走りびっ

くりするゼクロムとバクフーン。
その表情は、なんとも妖しい笑みを浮かべていた。

「で？　貴女は何者なんです？」
「なんでアンタなんかに素性を明かさなきゃいけないワケ？」
「……へぇ……。私に、そんな事言って、いいんですか……？」

何時まで経っても自分の事を離さないので、遂に我慢の限界なのか、一言一言に圧を籠め始めるレシラム。

「……あたしの素性を明かす前に、そろそろボーちゃんに思い出してくれたかしら？」
「……すー……」
『ね、寝てるし……』

考える事に疲れたのか、なんとも器用に低空飛行をして翼を動かしながらも、眠りこけるボーちゃん。

「や、やるわね……。寝たまま飛んでるなんて……」
「そこは普通怒る所じゃ……」
「ボーちゃんだから許されるのよ」
「えぇぇ……」

冷静に突っ込むのだが、訳のわからない理論で論破されてしまう。

「まあでも、起きて貰わなきゃ話が進まないわね」

と言いながら、ボーちゃんを揺さぶるバクフーン。だがしかし、揺さぶられた所で返ってくる反応は……

「アイス〜……♪」
『ですよねー……』

皆わかりきっていたらしく、同じ反応をする。

「……も、もういいわ。話を進めるわよ？　私はバクフーン。『灼眼の業炎』というのは私の事よ。」
「『灼眼の業炎』だと……？」

一人食い付くラムパルド。他の者は皆頭に「？」マークを浮かべている。

「『灼眼の業炎』って言やぁ、伝説の最強コンビ『灼銀』の片割れじゃねぇか！」
「よく知ってるわね。」

またもや発せられた謎の単語に、皆の疑問は増えるばかり。

「因みに、そのもう片割れっていうのが、ボーちゃんなのよ」
『……ま、マジですか』

ボーちゃんどんだけ通り名持ってるの。と皆心に思うのだった。

第二十八話　多すぎェ…（後書き）

最早何が書きたかったのやら↑

ボーちゃん「ん～、なんだろね～？」

てか寝てんじゃないよボーちゃん（汗）

ボーちゃん「ねむたくなっちゃった♪」

……あのねぇ（汗）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5628j/

とあるポケモン達の旅

2011年10月9日20時30分発行